



TITLE:

明代の糧長について：とくに前半期の江南デルタ地帯を中心にして

AUTHOR(S):

小山, 正明

CITATION:

小山, 正明. 明代の糧長について：とくに前半期の江南デルタ地帯を中心にして. 東洋史研究 1969, 27(4): 386-430

ISSUE DATE:

1969-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152784>

RIGHT:

明代の糧長について

——とくに前半期の江南デルタ地帯を中心にして——

小 山 正 明

- 一 は し が き
- 二 糧長設置單位としての區について
- 三 糧長の機能
- 四 糧長の社會的地位
- 五 結 語

一 は し が き

明代の糧長については、すでに吳晗、星斌夫、川瀬智壽子、梁方仲、西野正次、山根幸夫の諸氏によって論ぜられており、^①とくに梁方仲氏の著書は、糧長の制度的な變遷、その他明代社會における糧長のもつ諸側面につき廣く言及している。以下本稿で採上げようとする問題は、いづれも從來の研究で多少とも觸れられてきたものであるが、糧長設置單位としての區の行政區劃としての意義、そこでの糧長の果たした機能、および明代における糧長の社會的地位の諸点につき、若干史料を補足して検討してみたいと思う。

二 糧長設置單位としての區について

明代の糧長は、洪武四年にほぼ糧一萬石を基準に初設され、同十五年に一旦廢止されたが、同十八年に至り再び復活されて、その後嘉靖期以降には種々の變動を被りながらも清初に及んだ。本稿で採上げるのは、主として嘉靖期以前の糧長についてであるが、この時期においても洪武十五年以前の糧長と十八年復活後のそれとの間には、その内容に多少異なる点があるようである。まず洪武十五年以前の糧長について傳える「永樂大典」^{卷二二}湖・湖州府三田賦の條所引の「吳興續志」の記事を検討してみる。

糧長。洪武四年始置。每糧萬石設糧長一名・知數二名。推糧多者爲之。建倉於鳳陽府。歲收秋糧。自令出納。其糧少地廣者。又不拘萬石之例。續於每倉增副糧長二名。不及萬石者。尋革其副。今六縣計六十五倉。正副糧長一百五十九名。詳具各縣。

〔烏程縣〕糧長。洪武五年初立。每糧萬石爲一倉。糧長一名。共一十有八。七年每倉又增副糧長二名。共爲五十四名。

〔歸安縣〕糧長。洪武四年始設。每糧一萬石。設正糧長一名・知數二名。推糧多者爲之。建倉於鳳陽府。歲收秋糧。着令出納。每倉續增相副糧長二名。本縣該糧一十萬六千四百餘石。計正糧長一十七名。相副糧長三十四名。知數三十四名。

〔長興縣〕皇朝糧長。本縣糧六萬石之上。共設正糧長六名。續增相副糧長一十二名。共一十八名。

〔武康縣〕皇朝糧長之設。本以萬石置倉。倉設糧長一名・知數二名。後又增設相副糧長一名。縣境山多田少。歲輸秋糧僅一萬有奇。然以山鄉遼闊。難於集事。遂增置糧長七名。後復增相副糧長倉各二名。尋又革去。今實爲倉七。糧長七名。知數一十四名。

〔德清縣〕皇朝糧長之設。本以萬石置倉。倉設糧長一名・知數二名。後又增設相副二名。洪武十年以正設管糧不滿萬石者。革去相副八名。今實在糧長二十二名。

〔安吉縣〕皇朝糧長本以萬石置倉。設糧長一名・知數二名。縣境山多田少。歲輸秋糧一萬有奇。山鄉寥遠。難於集事。增爲正糧長七名。後又增相副糧長二名。尋又革去。今實爲七倉。糧長七名。

第一表 洪武10年湖州府下秋糧正耗米

(勺以下省略)

		石	斗	升	合
湖州府	546,535	6	4	2	
烏程縣	189,380	9	8	4	
歸安〃	176,410	5	4	4	
長興〃	66,712	4	2		
武康〃	15,362	3	3	4	
德清〃	83,926	7	8	5	
安吉〃	14,411	4	9		

右の記事につきまず注目されるのは、糧長初設を述べた「明實錄」洪武四年九月丁丑の條に「糧萬石を以て率と爲し」て糧長を設置するとし、「吳興續志」にも同様の記述が見られるが、この糧一萬石は秋糧一萬石を意味したことである。この點は、武康縣・安吉縣がともに秋糧一萬石有奇であるにもかかわらず、山間部に位置するため糧一萬石の率に拘泥せず糧長を増置したとされることがからも窺えるが、これを確認させるのは「吳興續志」に「皇朝洪武十年之數」として掲げられた湖州府下各縣の秋糧額(第一表)と糧長數との對應である。第一表によれば、烏程縣は秋糧正耗米十八萬九、三八〇石餘に對し正糧長十八名、同じく歸安縣は十七萬六、四一〇石餘に對して十七名、長興縣は六萬六、七一三石餘に對して六名、德清縣は八萬三、九二六石餘で十名と、武康・安吉の山間部二縣を除けば秋糧正耗米一萬石につき正糧長一名の原則がほぼ守られている。したがって、初設時の糧長は秋糧一萬石を基準に設けられるのが原則であったことになる。第二に、烏程縣の條に「糧長。洪武五年勅立。每糧萬石爲一倉。糧長一名。」と言われ、武康縣・德清縣の條には「皇朝糧長之設。本以萬石置倉。倉設糧長一名。」とあり、また安吉縣の條にも同趣旨の記述があるように、秋糧一萬石ごとに一倉が建てられたが、糧長の重要な任務は、この秋糧收納倉庫の管理であった。

武康縣・安吉縣のような、秋糧一萬石餘にもかかわらず正糧長七名が設けられた縣でも、秋糧收納倉庫は正糧長數に見合う七倉が建てられていること、洪武七年に増設された副糧長も(烏程縣の條)、一萬石以上の倉にはあるが倉ごとに設けられていること、糧長は毎歲秋糧を收めてその出納を掌るとされていることは、糧長の職務が秋糧の徴收とともに、この秋糧收納倉庫の管理にあったことを示している。第三に、「吳興續志」は元代の鄉村統治組織を説明して、

元各都設里正・主首。後止設里正。以田及頃者充。催辦稅糧。

と述べ、鄉村統治の中心的行政區劃が都であったことを示しているが、秋糧一

萬石を基準とする糧長は、この元代以來の鄉村行政區劃との關連において設置されたのではなく、あくまで秋糧一萬石を收納する倉庫の管理を中心として設けられたものと云えよう。

以上の諸點よりすれば、洪武十五年以前の糧長は、秋糧一萬石を基準として建てられた倉を中心に、その收納・解運などの管理を目的とするものであったと言える。

ところが、洪武十八年復活せしめられた糧長の場合には、その管轄範圍として區と呼ばれる區劃が現れるようになる。

「明實錄」洪武二〇年二月戊子の條には、

浙西布政使司及直隸蘇州等府縣。進魚鱗圖冊。……遣國子生武淳等往各處。隨其稅糧多寡。定爲幾區。每區設糧長四人。使集里甲耆民。躬履田畝以量度之。

とあり、區ごとに糧長四人が設けられたとしているが、洪武十九年に頒行された「御製大誥續編」水災不及賑濟第八十五に、

往爲有司徵收稅糧不便。所以復設糧長。……當復設之時。特令赴京面聽朕言。關給勘合。不許地方犬牙相制。只教管着周圍附近人戶。易催易辦。若區內有灑派的。教收在自已下。不過割的。便過割了。

とあつて糧長管轄區域としての區が見え、同じく洪武十九年頒行の「御製大誥三篇」拖欠稅糧第四十一にも、

設置糧長。惟在催徵本區內一萬石稅糧。

と言われて、一萬石という基準にも言及されているが、管轄範圍としての區が示されている。以上の諸例からして、洪武十八年の糧長復活に際し、區を單位に糧長設置が行なわれたことは明らかであるが、「明實錄」洪武三〇年七月乙亥の條は、

命戶部。下郡縣更置糧長。每區設正副糧長三名。以區內丁糧多者爲之。編定次序。輪流應役。周而復始。

と述べ、ここに糧長設置單位としての區が最終的に確定されることとなった。

それでは、この糧長設置單位としての區は明代鄉村統治機構の中でどのような地位を占めたのであろうか。まず手掛り

第二表 吳江縣下の行政機構・役目表

書算數	經催數	老人數	里長數	保長數	坊長數	扇書數	糧長數	里數	保數	區數	
36	18	18	18		2	2	2	18		1	一都
12	6	6	6					6			二都南
54	27	27	15	12	4	4	4	15	12	2	二都北
30	15	15	15		4	4	4	15		2	三都東
26	13	13	13		2	2	2	13		1	三都西
40	20	20	20		2	2	2	20		1	四都
44	22	22	22		2	2	2	22		1	五都
36	18	18	18		2	2	2	18		1	六都
24	12	12	12		2	2	2	12		1	七都
28	14	14	14					14			八都
24	12	12	12		1	2	2	12		1	九都
40	20	20	20		4	4	4	20		2	十都
46	23	23	23		4	4	4	23		2	十一都
10	5	5	5					5			十二都
30	15	15	15		2	2	2	15		1	十三都
20	10	10	10		4	4	4	10		2	十四都
	14	14	14					14			十五都
26	13	13	13					13			十六都
36	18	18	18		4	4	4	18		2	十七都
36	19	19	19		2	2	2	19		1	十八都
48	24	24	24		2	2	2	24		1	十九都
26	13	13	13		2	2	2	13		1	二十都
16	8	8	8		2	2	2	8		1	二一都
16	8	8	8		2	2	2	8		1	二二都
40	20	20	20		4	4	4	20		2	二三都東
30	15	15	15		4	4	4	15		2	二三都西
38	19	19	19		2	2	2	19		1	二四都
44	22	22	22		4	4	4	22		2	二五都
54	27	27	27		4	4	4	27		2	二六都
42	21	21	21		4	4	4	21		2	二七都
84	42	42	42		12	12	12	42		6	二八都
66	33	33	33		9	9	9	33		4 1	二九都 區扇

として「嘉靖吳江縣志」^{卷十}食貨志「徭役の記載により、縣下の行政機構とそれに應ずる各役目を表に示すと第二表のようになる。これによると、二都南、八都、十二都、十五都、十六都のように區が設置されず、したがって糧長の置かれていない都もあるが、^⑩他は大部分一都がそのまま一區となるかあるいは二區となり、二八都が六區、二九都が四區一扇となつてゐる。このことは、區の設置が元代以來の鄉村行政區劃たる都を基準とし、一都をそのまま一區とするか、あるいは數區に分割したことを意味する。この都を基準とする區の設置は他の地域でも一般に言えることで、同じく蘇州府下の「^卷嘉定縣志」一疆域考《鄉都》では第三表のように、十五都、畸零二二都が半區一扇とされるほかは、每都一區あるいは數區となつてゐる。^⑪松江府下の例では、「^卷弘治上海縣志」二鄉保によれば、第四表のごとく二五保を除いて每保一區ないし數區

であり、嘉興府下の嘉善縣では（第五表、「正嘉善縣志」^卷一郷都による）、區の記載のない都を除いてやはり一都が二・三區よりなり、「^天啓海鹽縣圖經」^卷六食貨篇下役法には、

一都東區・西區、三都區、五都區、六都區、七都區、九都區、十三都東南區・西南區・東北區・西北區、十四都東南區・西南區・東北區・西北區、十六都東區・西區、（下略）

とあり、一都が一區もしくは數區よりなっている。これらの諸例よりすれば、揚子江下流のデルタ地帯での區の設定は、

第三表 嘉定縣下の都・區・扇

守信郷領都六			依仁郷領都八			服禮郷領都五		
東一都	一區	正副二扇	中七都	一區	正副二扇	十四都	一區	正副二扇
西一都	同右	同右	南七都	同右	同右	十五都	半區	一扇
南二都	同右	同右	北七都	同右	同右	十六都	一區	正副二扇
北二都	同右	同右	東八都	同右	同右	十七都	同右	同右
東三都	同右	同右	西八都	同右	同右	十九都	同右	同右
西三都	同右	同右	九都	同右	同右	二一都	同右	同右
南四都	同右	同右	南十都	同右	同右	循義郷領都三		
北四都	同右	同右	中十都	同右	同右	二二都	一區	正副二扇
東四都	同右	同右	北十都	同右	同右	崎零二二都	半區	一扇
西四都	同右	同右	南十一都	同右	同右	二三都	一區	正副二扇
五都	同右	同右	中十一都	同右	同右	二四都	同右	同右
南六都	同右	同右	北十二都	同右	同右	樂智郷領都二		
中六都	同右	同右	南十二都	同右	同右	二六都	一區	正副二扇
北六都	同右	同右	十三都	同右	同右	二七都	同右	同右

第四表 上海縣下の保・區

長人郷			北亭郷		
十六保	三區		三一保	一區	
十七保	三〃		三二保	一〃	
十八保	二〃		三三保	一〃	
十九保	七〃		三四保	二〃	
二十保	三〃		新江郷		
二十一保	二〃		四四保	一〃	
高昌郷			四五保	二〃	
二二保	三〃		四六保	二〃	
二三保	一〃		海隅郷		
二四保	三〃		四七保	一〃	
二五保	一〃		四八保	一〃	
二六保	一〃		四九保	二〃	
二七保	一〃		五十保	四〃	
二八保	一〃				
二九保	一〃				
三十保	一〃				

第五表 嘉善縣下の都・區

思賢郷		遷善郷		麟腿郷		永安郷		奉賢郷	
三三都	下保東區・下保西區	三四都		三五都	東區・西區	三七都	南區・中區・北區	三八都	南區・中區・北區
三九都		四十都	南區・中區・北區	四十都	南區・北區	三七都	南區・中區・北區	三九都	南區・北區
四十都									

（胥山郷は「五都。里有十六」とあるのみで都・區名を示さない。）

都を基準として舊來の一都をそのまま一區とするか、もしくは數區に分割するのがほぼ一般的な形であったと言えよう。

これに對してデルタ地帯以外の地域では、都を基準としながらも數都を合して一區とするのが通例であったようである。浙江金華府下の「嘉武義縣志」卷一「輿地類」《鄉隅》には、

第一東區 管催五都六都七都糧稅 第二西區 管催二十三都二十四都二十六都糧稅 第二東南區 管催十六都十七都十八都二十都糧稅 第二東北區 管催四隅一都二都 第二西南區 管催

四都十一都十九 第二西北區 管催八都九
都小二十都糧稅 都十都糧稅 第三區 管催三都十二都十
三都十五都糧稅

とあり、數都を合して一區としており、「靖永康縣志」卷郷里附區分には、

第一西北區 管催十七・廿一・廿二・
廿六・三十五都糧稅

東北區 管催廿二・廿三・廿四・廿五・
四十五・四十六・四十七都糧稅

西南區 管催遊僊三十三半・合德三十三半・三十四・武平三十六
半・合德三十六半・三十七・三十八・三十九都糧稅

東南區 管催四十・四十一・四十二・
四十三・四十四都糧稅

第二東北區 管催廿七・廿八・廿九・太平三十三
半・遊僊三十三半・三十一都糧稅

西北區 管催十四・十六・十八・
十九・二十都糧稅

東南區 管催一都・十五都・
三十二都糧稅

西南區 管催坊隅・二都・
三都・四都糧稅

第三 東區 管催五都・七都・
十二都・十三都糧稅

西區 管催八都・九都・
十都・十一都糧稅

とあつて、二二都が第一西北區・東北區に分割されているのを例外として、全て數都を合して一區としている。また「弘
赤城新志」^{卷十} 職役には、

糧長舊例縣凡幾區。區凡幾名。有正有副。擇里之丁糧相應者爲之。謂之永充。以催稅糧。今更以都爲限。都一名或二名或三五名。歲
輪爲之。

とあり、都そのものを單位に糧長が置かれ、南直隸鎮江府の「熙金壇縣志」^卷三里甲では、

明以一百一十戸爲番。……有糧長。以徵收二稅。舊十區。區設一名。擇產殷者爲之。

と述べた後、

一區 一都二都三 八都九都十都十一 五都六都十四都十五都十六都十七都十八 十九都二十 六區 二十二都二十三都
 二區 一都二都三 八都九都十都十一 五都六都十四都十五都十六都十七都十八 十九都二十 六區 二十二都二十三都
 七區 七都二十八都三十三都 八區 八都 九區 二十九都三十都三十一 十區 三十四都三十五都三十六都
 とあるように、複數都を合して一區とし、^④ 江西瑞州府の「^康新昌縣志」^卷二職役志にも、

壹區 四都五都十一都三十七都三十八都三十九都四十都四十一都 貳區 六都七都八都九 參區 三十都三十一都三十二都三十三
 五區 東北隅西南隅一都二都三 陸區 二十三都二十四都二十五都二十六都二十七都二十八都二十九都
 とあつて、同じく複數都で一區を構成している。

以上極めて限られた事例についてではあるが、デルタ地帯では都を基準にこれを數區に分割し、それ以外の地域では複數都を合して一區とするというのが大勢的傾向であつたと思われ、ともに元代以來の鄉村行政區劃たる都が區設定の基礎をなしていたと言えよう。^⑤

さて、當初の吳江縣の場合にもどると、第二表に明らかなように每區糧長二名に對し扇書二名、すなわち各糧長一名に對し扇書一名が附屬されている。^⑥「^嘉吳江縣志」^卷十徭役の項には、

冊役。每十年一造黃冊。每里差其丁糧上戸十家。編爲里長。次百家爲甲首。輪年應役。里中催徵・勾攝・供應之事皆責焉。又歲輪一人爲經催。^⑦以顧催徵。書算一人以掌稅額。皆豫造定外。又歲覈老人一人。以斷鄉曲。而又按區設糧長。以收稅糧。扇書以稽出納。塘長以修水利。別有縣總書算。^⑧以主起存之數。而糧長之中又復審其上者役之。雖非冊定。然皆與里長從事貢賦之間。故總名之曰冊役云。

とあり、この扇書は「出納を稽う」と言われているから、糧長の下にあつて帳簿類を管理していたものであつた。そしてさらに、糧長の中よりその有力なものを選んで縣全體の起運・存留の冊籍を掌る縣總書算が置かれ、また區下の各里には、里長の下で里内の帳簿を管理した書算が二名ずつ配屬されていたから、吳江縣下の鄉村行政系統は、縣總書算（縣全體）―糧長・扇書（區）―里長・書算（里）という構成をとつていたことになる。

この縣總書算・扇書・書算などは、吳江縣下のみならず廣く置かれていたようで、「弘治赤城新志」卷十 職役は、書算。縣有總書。都有里書。里有壕手。

として、縣全體の書算をあずかるものとして總書、都——先述のように、台州府下では都を單位に糧長が設けられた——には里書、里には壕手と、吳江縣と同一構成を示し、「天啓海鹽縣圖經」卷六 食貨篇下之役法は、「萬曆二十九年前任李編審事宜」に附した「又條議四款」の中で、

夫縣有縣總。區有區總。圖有圖總。

と縣總・區總・圖總の存在を述べ、「萬曆秀水縣志」卷三 食貨志・田賦《戶賦》には、

夫一里之書。謂之知數。知數之上有區書。區書之上有縣總。

とあり、里——區——縣に對應した知數——區書——縣總の系列が示されている。そして、これらの縣總は「康熙石門縣志」卷二 紀疆《賦役》の項に、

縣總。向于糧長內僉點貳名。一管米數。一管銀數。

とあるように、吳江縣と同じく糧長より選任されたものであった。さらに鎮江府丹陽縣の人姜寶の「姜寶阿文集」卷一 家居稿四記議《議革區書以清理錢糧》には、

蓋圖冊既有里書、攢造。都冊又有區書、坐派。縣冊又屬總書總管。

とあり、「萬曆宜興縣志」卷四 食貨志《徭役》には、

里甲役法。……於該區。選善算而有行者一人爲區總。於樂縣。選其尤善算而有行者一人爲縣總。

とあって區總・縣總の名が見え、「萬曆常州府志」卷六 錢穀三徵輸には、

嘉靖四十五年。武進縣知縣謝師嚴立徵糧一條鞭法。先是。夏稅・秋糧派征項數繁雜。設有縣總分派。其間不無緩急。縣總隱操其權。與各糧長爲市。以致侵欺賄賂。不均之甚。

とあって、縣總が夏稅・秋糧の具體的割當てを行なつていたことを述べている。また「萬曆青浦縣志」三役法は、

府縣總書。是役有黃冊總・白冊總二項。而白冊總掌一歲銀米出入之數。尤爲緊要。……本府總書三縣（華亭・上海・青浦）輪點。

と述べ、「萬曆上海縣志」四徭役にも、

府縣總書。本縣先年總書造作姦弊。侵盜錢糧。……本府總書。向於三縣輪點。

とあるから、總書は縣のみならず府にも置かれ、縣總書より輪番であつたこととなる。この府總書は松江府下のみならず、「崇禎吳縣志」九徭役に、

（隆慶二年。知府蔡國熙）革府總・縣總僉點大戶。改選書役承充。

と蘇州府にも見えており、その他の諸府にも置かれたものであろう。

以上、洪武十八年糧長復活後における區の内容を考えてきたのであるが、その結果、糧長設置單位としての區は、一都一區、あるいは一都を數區に分割する場合（デルタ地帶）、複數都を合して一區とする場合（デルタ地帶以外の地域）との相違はあるが、いずれも元代以來の縣下鄉村行政區劃としての都を基準として設けられたこと、區には糧長の下で帳簿類を管理する扇書（區書・區總など）が配屬され、縣下の行政系統が縣總（縣全體）―糧長・扇書（區）―里長・書算（里）という構成をとっていたことがほぼ明らかになったと思う。洪武十五年以前の初設期糧長にあっては、秋糧一萬石を基準に秋糧納入倉庫が建てられ、糧長は専らこの倉庫を管理し、秋糧の收納、その解運にあたつたものであつたが、洪武十八年以後においては、糧長設置單位としての區は、元代以來の鄉村行政區劃としての都を基準に設けられ、縣と里との中間に位置する行政系統の中に明確に位置づけられることとなつたのであつて、糧長は單に糧米の收納・解運のみではなく、行政區劃としての區内の管轄にあたるようになってきたことが窺われるのである。そして、縣全體の起運・存留の數を掌り、夏稅・秋糧の具體的科派に任じた縣總は、有力な糧長より選任されたと言われ、府全體について縣總と同様の機能をもつたと思われる府總は、この縣總より任ぜられたから、明代鄉村統治の上で糧長は極めて重要な地位を占めてい

たと言わねばならない。次節では、この區を中心として糧長の果していた機能につき考えてみる。

三 糧長の機能

糧長の果した機能としては、從來の諸研究も指摘しているように、まず第一に區内各里よりの糧米の徴收と、その所定倉庫への解運があげられる。ただしこの場合に注意すべきことは、洪武十五年以前にあっては、秋糧一萬石を基準にその收納倉庫が建てられ、糧長は「歲收秋糧。自令出納。」と言われるように、秋糧の徴收とその收納倉庫の管理が最大の職務であったが、洪武十八年區を單位に復活設置された糧長は、單に秋糧のみならず夏税を含めた區内の税糧全體を管轄するようになった點である。「御製大誥三篇」臣民倚法爲姦第一は、

本以大戸爲糧長。掌管本都鄉村人民秋夏稅糧。

とし、糧長は夏税・秋糧を掌管すべきものと明確に規定され、「弘赤城新志」卷十 職役に、

糧長舊例縣凡幾區。區凡幾名。有正有副。擇里之丁糧相應者爲之。謂之永充。以催稅・糧。今更以都爲限。

と述べられ、「正德蘭谿縣志」卷二 官政類《役法》には、

有糧長以徴收二稅。

とあり、「嘉興吳江縣志」卷十 食貨志二徭役にも、

又按區設糧長。以收稅・糧。

とあるのは、いずれも糧長が區内の夏税・秋糧の徴收にあたったことを述べたもので、糧長が鄉村行政區劃としての區内の夏税・秋糧全體に責任をもたされていたことを示している。

つぎに指摘すべき點は、糧長は單に區内の税糧徴收にあたったのみならず、區内における徭役科派をも掌っていたことである。「明實錄」宣德六年四月癸亥の條には、

監察御史張政言。洪武間設糧長。專辦稅糧。近見浙江嘉・湖。直隸蘇・松等府糧長。兼預有司諸務。徭役、則縱富役貧。科徵則以一取十。

と言われ、同じく正統十四年十二月壬申の條に、

兵科給事中劉斌奏。……及賦稅之出。力役之徵。區長・里正往往避疆後弱。

とあるのは、いずれも糧長が徭役科派に干與していたことを示すものであるが、陳繼「怡菴文集」^{卷十}墓碑銘《處士趙繼

道墓誌銘》は、

處士諱繼。字繼道。世於宋有屬籍。……縣（長洲縣）舉爲萬石長。平訟均徭。治稅賦咸得其道。……宣德六年七月十九日。處士以疾

卒。享年七十有一。

と述べ、長洲縣の糧長趙繼は「訟を平かにし、徭を均う」したと傳え、吳寬「匏翁家藏集」^{卷六}周原凱墓誌銘には、

君諱南。字原凱。姓周氏。崑山石浦人也。曾祖桂一。祖子明。父仁。代以力田致饒裕。當國初。初選長鄉賦者。周氏在選中。至原凱蓋百年于此。原凱尤鄉人所謂賢者。……率先公後私。其催科之善。繇役之均。民不擾而事亦濟。……其終以成化甲午三月廿六日。享年六十。

とあって、周南の家は洪武以來成化年間に至るまで糧長であったが、「催科之善」とともに徭役の割當てを均うしたと言われ、顧清「東江家藏集」^{卷一}闕氏三世墓表にも、

闕氏世爲上海人。家漢成里之分莊。君之祖疇隱翁諱章字彥莊者。以考文華妣湯孺人之命贅沈氏。始居南漣浦。……自疇隱以來世掌鄉政。強威弱撫。稅役必均。鄉之人咸德之。

とあり、祖父疇隱以來「鄉政を掌る」とは代々糧長にあたってきたことを示すが、この場合にも「稅役必均」と言われ、また葉盛「涇東小稿」^{卷四}許翁德器挽詩序には、

許翁其先嘉定人。今居崑城之柴巷者。兄弟數人。稱富家。翁之行則三也。……翁時尚強壯。佐其諸兄。理其鄉之租稅徭役。

とあって、崑山縣の糧長許讚は租税とともに徭役を理めたとあるから、これらの記述も糧長が徭役科派に與つていたことを示唆している。

このような糧長と徭役科派との關連を確認させるのはつぎの史料である。「萬曆上海縣志」^{卷四}徭役には、

均徭。往年編審均徭。預令糧長查照丁田。註三等九則。造冊面審。

とあり、糧長は均徭科派臺帳を造冊してその割當てを行なつたとされ、「萬曆嘉定縣志」^{卷七}田賦考下田賦條議所收の《知縣

李資坤申議六事》^⑩にも、

其二。公審編以均徭役。照得。本縣每年坐派銀差共二百二十七役。共銀二千八百一十八兩。力差共三百三十一役。共銀三千七十一兩五錢。通共銀五千八百八十九兩五錢。於繁縣流都六百六十八里應審里甲戶內人丁并官民田蕩爲掣尖冊。第其上下而審編之。其法頗善。節年審編之弊。本縣全憑糧長掣尖。糧長挽串書手作弊。其弊有四。曰受賄。曰畏勢。曰干親。曰有讐。或以戶產大而家道殷實者。掣之于後。或以戶產小而家道貧難者。掣之于前。

と言われ、嘉定縣では均徭科派臺帳として掣尖冊と呼ばれるものが作られていたが、その際糧長が書手と通謀して、重役にあたるべき上戸を後の方に書いて輕役をあてるようにし、逆に輕役にあたるべき下戸を前に書出して重役をあてるようにしたというから、均徭科派臺帳たる掣尖冊は糧長により作製されていたことになる。以上によれば、糧長がその區内の均徭科派を掌つていたことは明らかであるが、文德翼「均徭役議」^⑪（嘉慶嘉興府志）^{卷七}藝文二所收）は、

國初編役。以百一十戶爲里。……爲糧長者。以殷實者爲之。督切鄉賦。多者至萬石。次亦不下數千石。大抵立法。里長多主賦。而糧長兼主役矣。

と述べ、里長が主として税糧徵收にあたるのに對し、糧長は税糧のみならず徭役をも兼ねて掌つたとしているのは、糧長と徭役科派との關連を端的に指摘したものにはかならない。また「明實錄」洪武十九年六月癸丑の條には、

給各處糧長所造賦役籍冊之費。凡籍有五千戶者鈔五錠。隨其戶之多寡而加損焉。

とあり、糧長による徭役科派臺帳たる賦役籍冊の作製が伝えられているが、この賦役籍冊が「明實錄」洪武十八年正月己卯の條に、

命天下府州縣官。第其民戶上中下三等爲賦役冊。貯於廳事。凡遇徭役。發冊驗其輕重而役之。以革吏弊。^②

と云われる賦役冊にあたることは疑いない。^③したがって、糧長による徭役科派臺帳の作製は、洪武十八年における糧長制復活以後明代を通じてほぼ一貫して行なわれてきたものと云えよう。^④

以上によって、糧長が單に區内の稅糧徵收のみならず、徭役科派臺帳の作製とその具體的科派にもあたっていたことが明らかになったと思う。明代における國家收取の基幹は稅糧と徭役にほかならないが、この二者が區を單位として行なわれたことは、縣と里との中間の鄉村行政區劃としての區の性質を明白に示すものであり、またそれを統轄する糧長が、鄉村統治系統の中で里長の上に立つ重要構成要員として位置づけられていたことを意味する。

こうした區内における稅糧徵收、徭役科派のほかに、さらに糧長の機能として鄉村裁判と勸農を擧げることができる。鄉村裁判については、すでに指摘されているように、「明實錄」宣德六年四月癸亥の條に、

監察御史張政言。洪武間設糧長。專辦稅糧。近見浙江嘉・湖。直隸蘇・松等府糧長。兼預有司諸務。徭役則縱富役貧。科徵則以一取十。詞訟則顛倒是非。糧稅則徵斂無度。

と言われ、「訶訟は則ち是非を顛倒し」ているとあり、同じく正統十一年五月甲戌の條には、

湖廣布政司蕭寬奏。近年民間戶婚・田土・鬭毆等訟。多從糧長剖理。甚至貪財壞法。是非莫辦。屈抑無辜。乞嚴加禁約。今後不許糧長理訟。從之。

とあって、糧長が戸婚・田土・鬭毆などの裁判にあたっていたことが伝えられ、この時に糧長の裁判干與は禁止されたが、實際には依然として行なわれていた。「民相城小志」^⑤卷四人物明には、

王策字近溪。父喪僅九歲。……時吳中困掌賦。里中以策名上於司計者。策悉心部署。夙夜寅勞著績。御賦者二十餘年。……蓋糧長一

役與古三老等。分地而治。凡錢穀獄訟之事。得先質成可否。鄉人莫不感其德。

とあつて、糧長は錢穀とともに獄訟のことも掌つたとされており、陳繼「怡菴文集」^{卷十}墓碑銘《處士趙繼道墓誌銘》には、

處士諱繼。字繼道。姓趙氏。……縣（長洲縣）舉爲萬石長。平訟均徭。治稅賦咸得其道。

とあり、長洲縣糧長趙繼は「訟を平らかにし」たと言われ、張寧「方洲先生集」^{卷二}墓誌銘《許一樗墓誌銘》は、

予友海昌一樗翁許紉用文卒。……年十八習舉子業。值母病劇。繼罹大故。憂勤積歲。遂棄其學。尋以鄉大家長賦稅。先業益振。……

上輸官稅。下理私訟。旁午紛紜。不可舉數。用文以一身應酬其間。……距其生洪熙乙巳。春秋六十有三。

と述べて、海鹽縣糧長許紉が「私訟を理め」ていたことを傳えている。またさらに呂原「呂文懿公全集」^{卷十}明故水南黃先生

墓誌銘には、

先生江西南昌人。姓黃諱銓。字大雅。一字正巳。嘗隱於水南別墅。摺紳因稱曰水南先生。……先生性耿直。爲鄉人所信服。其有爭訟者。多不之公府而求先生一言。剖其是非即引退。郡縣見先生姿秀爽。欲延爲曹掾。先生固辭弗就。而繼其祖以督征區賦爲萬石長。……

其卒乃天順元年正月二十六日。享年六十有一。

とあり、同じく「呂文懿公全集」^{卷十}明故處士聶君合葬墓誌銘に、

處士諱正。字崇端。姓聶氏。吉安吉水人。世居住岐大巷里。……嘗爲萬石長。以義征斂。租不告逋。……鄉人有忿爭者。每就質處

士。得一言輒帖然以服。……處士生以洪武庚午三月二十二日。而卒于景泰乙亥九月日。壽六十有四。

と言われており、何良俊「四友齋叢說」^{卷十}史九にも、

余農家子也。世居東海上。乃僻遠斥鹵之處。自祖父以來。世代爲糧長垂五十年。……然嘗憶得小時見先府君爲糧長日。百姓皆怕見官府。有終身不識城市者。有事卽質成於糧長。糧長卽爲處分。卽人人稱平謝去。

とあるのは、いづれも糧長による鄉村裁判を立證するものであらう。

これらの裁判は官府における正規の手續きを経たものではなく、當該地域の慣習法と糧長の威信・面子を基礎にしたものであろうから、いわゆる排難解紛^①排解と分ちがたく結びついている。このことは前掲諸事例中よりも窺えるが、吳寛「匏翁家藏集」^{卷七} 隆池阡表は長洲縣の糧長沈恒以の傳を述べて、

聞昔正統間。周文襄公以工部尙書巡撫畿內。慨然以經理國用爲己任。戒郡縣慎選長田賦者。處士在選中。……若其忘怨釋歸。卹貧排難。爲惠不能盡書。

とあり、鄭曉「鄭端簡公文集」^{卷六} 碑銘《南潤徐翁墓誌銘》に、

翁諱瑤。字世美。別號南潤。……生于成化戊子三月日。歷弘治正德至嘉靖庚戌二月乙巳而卒。……甫年十八卽總鄉賦。出納萬斛。量槩必平。下無怨言。上無違事。人有隙辭。險健莫解。翁爲居間。數言而釋。

と言われているのは、糧長による排解を示すものである。

つぎに、糧長による勸農については、楊榮「楊文敏公集」^{卷二} 墓表《龔思齊墓表》に、

崑山有篤善之士龔思齊。以宣德癸丑五月己巳卒于家。……待族黨禮嫺親。處賓朋謹於禮節。邑里推重之。遂學爲糧長。以董一區賦稅。……方春播種。聞農家種子弗給。及難於食者。傾其家所藏以濟之。弗足復爲假貸以足之。歲畢。作桔槔分置。與人取水灌田。弗取其傭。

とあって、崑山縣の糧長龔思齊が春の播種期には農民に種子を給し、收穫後には桔槔を分置して灌水に備えたと伝えられており、これが糧長の高利貸資本としての機能と結びついて行なわれたことは右の文中からも窺えるが、單にそれのみではなく、糧長を通じて、その管轄下區内の賦・役徵收を確保しようとする國家權力の要請に沿って組織されたものでもあった。倪謙「倪文僖公全集」^{卷十} 序《送陸以誠還長洲序》は、

惟我聖祖起於畎畝。深知民事。拳拳以勸農爲先。……至於各鄉。必擇賢殷德厚爲人所素服者。以爲之長。俾之督農功總國賦。

と述べ、糧長の職務の一つとして「農功を督す」ことを擧げているが、史鑑「西村集」^{卷八} 行狀《曾祖考清遠府君行狀》

は、糧長による勸農の内容をさらに具體的に述べている。すなわち、

府君姓史氏。諱仲彬。字文質。清遠其號也。……用能以力田起家。甲其鄉。推擇爲稅長。時連歲水旱。加以軍興。調發劇甚。民斂或逃去。田多汙萊。稅不入。往往累及長。府君曰。田不闢而望稅之入得乎。故所設施。一以農事爲本。又以爲農出於人力。務愛養之。使其不攜。庶得盡力焉。乃約束管內。自己以下不得取民毫毛利。民多感悅。轉相告語。流亡復歸。當春則令田甲檢視耕墾。五日一具報。躬自考課。有未闢者。則召其人詰責之。若缺農器及人力種子。則調助之。更諭親戚假貸之。計畝至秋責償。或惰慢不肅。則杖而徇於衆。由是人相勸戒。墾田大增。府君又勞來不倦。爲相視原隰所宜。指授種樹之法。糞治之方。斂穫之節。秋果倍收。民皆有餘。稅入居最。縣官譽之。爲下其法諸鄉。……春秋六十有七。卒之日宣德二年三月十日也。

とあり、洪武より宣德初年にかけて吳江縣の糧長であつた史仲彬は、春の耕作期には田甲、すなわち管下の里長戸に耕墾を檢視させて五日ごとに報告せしめ、農器・勞働力・種子を按配し、土質に應じた作物・施肥・收穫などの農法を指導し、その結果「墾田大增」して「稅入居最」になつたとされているから、この勸農が區内における賦・役徵收確保を目的とし、またその角度からする農民再生産の維持であつたことは明らかであり、したがって、「有未闢者。則召其人詰責之し」、「或惰慢不肅則杖而徇於衆」という威迫を伴つて行なわれたのであつた。

このような管轄下區内における既耕地の維持、未耕地の開墾と同時に、災害時における被災田土の調査報告、抛荒田の除豁申請なども糧長によつて行なわれた。「御製大誥續編」糧長妄奏水災第四十六に、

若區内果有積年荒田。有司不行除豁。其刁頑之徒。借此名色。包荒虐害民者。爾糧長從實具奏。以憑除豁積荒。召民佃種。凡有水旱災傷。將所災頃畝人戶姓名。從實報官。憑此賑濟。

とあるのは、放棄された荒田の除豁申請と被災田土・人戸の調査報告を糧長に義務づけたものであり、鄭文康「平橋壘」^⑩十王克信墓誌銘に、

克信姓王。諱璧。克信字也。曾祖德茂。祖伯英。父景言。世以厚業退然隱處崑山澱湖之上。……爲萬石長。區有抛荒田。糧額四千。

民困賠納。頻年戶亡去者及半。克信懇爲巡撫尙書周公言。公以聞。詔除之。

と言ひ、また前引の史鑑「西村集」^{卷八}行狀《曾祖考清遠府君行狀》が、

洪熙初詔天下。戶紹而田蕪者除其額。許民自墾而薄稅之。然法令重。失實者。官與長連坐死。……府君獨慨然曰。此天子德意也。可懼禍以殃民乎。遂條上奏。可得減稅若干。

と述べているのは、糧長の申請により荒田除豁の行なわれた事例である。

以上のほかに、糧長による勸農のとくに重要な内容をなすのは水利に関するものである。陳實「祭酒琴溪陳先生集」^{三卷}

墓誌銘《無懷處士季君孺人薛氏合葬墓誌銘》は、

君諱鑑。字惟明。嘗慕古無懷氏之風。因以自號。先世家開封。……遂止^{（9）}常熟之千涇。復遷文村。……長御賦者數歲。縣官能之。而

民無怨言。所居近許浦塘。久涸寒。水幾不流。民病焉。乃羣訴諸縣。求濬鑿。號而曰。是役也。必得一人董正治之。非季鑑其誰可。縣從而召君使往。君性亦敏。善調度。丁夫餘四萬。指使如一人。水遂大利。……君卒於正德庚辰五月十日。年六十有四。

と述べ、常熟縣糧長季鑑による許浦塘の浚渫を傳えており、吳寬「匏翁家藏集」^{卷七}二「素菴府君墓表」には、

浙西有錢氏。莫盛於海虞^{（常熟縣）}。……府君諱完。字汝周。別號素菴。少孤能守先業。……其器局深濬果毅。多籌略。郡縣推長田賦。事既克舉。民不告勞。以地瀕湖。數遭水患。嘗募民築堤捍之。數年皆成腴田。

とあり、また「匏翁家藏集」^{卷七}一「姜正術墓表」にも、

將仕佐郎嘉興府陰陽學正術姜君。諱雍。字堯民。……父管長鄉賦。于官出納勞甚。君憂之。卽請曰。有事服勞子職也。兒雖疲癯。敢以身任。比年賦益完。……君固長於治事。於是事輒屬之。郡竝海。築堤捍水。功久弗成。至君督工卒成之。……享年七十有五。卒之日成化十四年五月十一日也。

とあって、いずれも糧長に指導された築堤事業を述べているが、しかし農民の再生産過程、およびそれと密接に絡みあった國家の農村支配の在り方をより深く規定するのは、こうした臨時的に行なわれた大規模な浚渫築堤工事よりも、とくに

江南圩田地帯では、毎年繰返される日常的な圩岸修理と灌排水作業、就中梅雨期などの出水時に必須となる排水作業の組織形態であらう。史鑑の「西村集」^{卷六}議《吳江水利議》には、

竊以爲今日措置之方。其要有四。……四曰專委任。夫事功之成由委任。委任之方貴專一。伏覩。永樂年間。凡興水利庶事皆責成糧長。而官則自爲節度之。蓋糧長之任。實在農功賦稅而已。其用心必專。自邇年以來。添設塘長。又立耆老。復革去塘長。而立耆長。又有屬官・義官之委。糧長・耆老之總。紛紛多制。一國三公。十羊九牧。民無定志。莫知所從。……伏望將所設諸色盡行革去。專令糧長・圩長管。糧長管其都。圩長管其圩。

とあり、一區内の水利關係庶務は元來糧長の責任であつたのに、最近塘長・耆老・耆長などの設立改廢が頻繁に行なわれ、組織系統が紊亂しているから、これら新設の諸役は全廢して、舊來のように一區は糧長に、一圩は圩長に管轄せしめよと主張している。これによると、ほぼ成化年間以前の時期には、一區内の水利は糧長の統轄するところであつたと思われる。ただ、これは必ずしも現役の糧長のみがあつたのではなく、區内の水利が現役、過役を含めての糧長層を中心組織される場合も部分的にはあつたようである。況鐘「明況太守龍岡公治蘇政績全集」^{卷十}條諭上革除圩長示（宣德五年十月二十日）には、

訪得。所屬長洲等七縣。先該欽差大理寺鄉胡（榮）^③將各縣糧長。每區設立總圩長・圩老六名。通該一千六百七十二名。并小圩長與同糧・里提督農務。相兼催辦稅糧。……緣圩長・圩老不係朝廷設置人數。擬合移關本府。轉達欽差刑部右侍郎成（均）^④。定奪示下施行。特諭。

とあり、また同書^{卷十}遵旨辨明誣陷奏（宣德七年二月二十八日）に、

訪得。侍郎成均所管本府七縣治農官。設立圩長・圩老九千餘名。俱係役過糧長大戶。近年以來。公然接受狀詞。挾制糧・里。本分差役不當。戶內稅糧不納。……生事害民。非止一端。本官（指す）^{（成均を）}明知不行禁止。查無舊設事例。已行除革。

とあつて、胡榮が江南を巡撫した際、すでに糧長にあてられたもの六名をもつて區ごとに總圩長・圩老が設けられ、現役

の糧長・里長および小圩長^⑤とともに「農務を提督」せしめられた。しかしこの場合にも、この總圩長・圩老は「朝廷設置の人数に係らず」とされ、「舊設の事例なし」を理由に廢止されており、一方「明況太守龍岡公治蘇政績全集」^{卷十}條諭上嚴革諸弊榜示（宣德七年四月十日）には、

一。各縣高低田地不一。河道有淤塞者。岸埝有坍塌者。該管官吏糧里人等。隨即修築疏通。毋致悞事。有妨農業。

と言われて、河道の疏通、圩岸の修築を糧長・里長の責任としているから、現役の糧長をして區内の水利を統轄せしめるのが本來の在り方であつたと思われる。

これらの記事によつて、ほぼ明代前半期までの鄉村水利機構は、現役、また場合によつては過役のものをも含めた糧長層を中心に、區内の里長、各圩の圩長により組織されていたことを確めえたと思うが、このことは、縣下の區―里という鄉村行政系統そのものが同時に水利組織をも構成していたことを示している。^{萬曆嘉定縣志}卷六田賦考中徭役には、

國初無塘長之名。其後始置。而縣之諸浦常爲潮沙淤沒。故塘長勞動。比之旁邑獨甚。往者屏水責之里長。築塘責之老人。

とあり、排水作業は里長の、築堤は里老人の責任であつたとしているが、姚文灝編「浙西水利書」^{今書}松學生金藻三江水學に、

一圖水利省視在里長。一區水利省視在糧長。

と言われ、同じく「浙西水利書」^{今書}三江水學或問下に、

客曰。不用耆（老）・塘（長）可也。又用糧（長）・里（長）可乎。野人曰。糧・里、舊所置也。耆・塘、今所增也。不足而增可也。既足而增可乎。所謂十羊九牧者也。

とあるのは、糧長（區）―里長（里）による水利規制が元來の體制であつたことを明らかにしている。

こうした糧長・里長を軸とした水利規制の、より具體的な様相を伝えるものとしては、まず「弘治吳江縣志」^{卷五}風俗のつぎの記事がある。

吳地平夷。盡爲田。略無曠土。然濱江傍湖最爲低窪。凡春夏之交。梅雨連綿。外漲泛溢。滄沒隨之。農家結集車廐。號爲大輶車。人無老幼遠近畢集。往往擊鼓鳴柝。以限作息。至有累日連月。朝車暮漲而不得暫休者。故鄉民每見經旬之雨則皆蹙額。其未耕也。憂水至而不及種。既種也。憂水至而不及實。迨秋之成。方以爲喜。每歲秋糧七十餘萬。其亦艱也哉。周文襄公巡撫之時。令樂縣排年里長。每名置官車一輛。假如某都某園田被水滄沒。則糧長拘集官車若干輛。督令入夫。併工車廐。須臾之間。水去皆盡。而又官給口糧以賑之。自文襄公去后。不復有此良法矣。

すなわち、江南の圩田地帯では、梅雨期の長雨で圩田が陥没すると、農家は龍骨車を集中的に投入して排水にあたり、これを大輶車と云ったが、太鼓や拍子木で音頭をとるという共同作業であった。そして周忱が江南巡撫であった時には、各縣の里長戸に每名一輛ずつ官車を作らせ、被水した園田がでると糧長がこの官車を集中して排水にあたつたとされている。この記述からも、排水作業における糧長と里長の中心的役割が窺えるが、とくに注目されるのは、周忱が里長戸に官車を備えさせたと言われていることである。これは周忱が江南巡撫をしていた時期の特例のようで、その後行なわれなくなつたとあるが、こうしたことが一時的にもせよ實施されたのは、龍骨車が農民の手下に少なくとも普遍的には保持されていなかったことを示唆するものであり、先にも引用した楊榮「楊文敏公集」^{卷二}墓表《龔思齊墓表》に、

歲畢。作桔槔分置。與人取水灌田。弗取其傭。

とあるように、また官車が里長戸により備えられたとあるように、龍骨車・桔槔などの日常的水利用具の主要具備者は糧長・里長層であつたと思われるのである。また「^嘉靖上海縣志」^卷七文志上所收の夏原吉「踏車歎」は、

東吳地眞水鄉。兩岸湧漲非尋常。……只緣田水仍齊腰。丁寧郡邑重規畫。集車分布田週遭。車兮既集人兮少。點檢農夫下鄉保。婦男壯健記姓名。盡使踏車車宿潦。自朝至暮無停時。足行車轉如星馳。糧頭里長坐擊鼓。相催相迫惟嫌遲。乘舟曉向車邊看。忍視艱難民疾患。

と述べ、農民男婦が姓名を登録して驅出され、糧頭、すなわち糧長、里長による太鼓の指揮下に踏車に強制される情景を

絞しているが、これらの記述からすれば、明代江南の水利機構、とくに農民經營の再生産に鍵鑰的地位を占める排水作業は、里甲組織を基礎とする鄉村統治Ⅱ賦・役徵收機構そのものによって擔われ、糧長・里長を中心に組織されていたと言えよう。したがって、糧長―里長という賦・役徵收機構は農民經營の再生産を媒介する共同體機能をも同時に併有し、また國家の側では、龍骨車・桔槔などの日常的水利用具の主要具備者たる糧長・里長層の在地における農民規制を賦・役徵收機構に組織し、またこれを媒介として農民支配を貫徹させていたと考えられよう。

以上述べてきたように、糧長は單にその區内の稅糧徵收のみならず、徭役の科派、鄉村における裁判・排解、區内田土の耕地としての維持および開墾、農法の指導、被災田土の調査と抛荒田の除豁、水利機構の組織など、「鄉政を掌る」と言われたように區内鄉村行政のほとんど全局面を掌握していたのであって、明代鄉村統治における文字通り中核的存在であった。それでは、こうした糧長が明代社會の中でどのような地位を占めていたのか、つぎにはこの點を検討してみる。

四 糧長の社會的地位

糧長が明代における最も有力な地主よりあてられ、また鄉村における豪族でもあったことはすでに說かれてきているが、ここでは、つぎの「庠村志」風俗の記事を手掛りに考えてみたい（説明の便宜のため、段落に分けて引用する）。

(A) 明初糧長責任甚重。穿帶糧長頭巾・大襪・阜韉。入見官府。以禮相待。

(B) 里排相見。站立不敢坐。

(C) 每都點選一名。糧銀俱取足於糧長。官府催徵。止比里排一二次。隨發與糧長比追。家中原設卓圍公座。并笞杖刑具。許硃票拘執。計日立限喚比里排。一如官府之法。隆慶時余祖充當。猶及見之。

(D) 至嘉靖中年漸廢馴。至今日。無論里排與糧長不相上下。卽甲下花民亦與里排抗禮。毫無尊卑矣。此風處處皆然。（下略）

(A)の部分によると、明代前半期の糧長は、糧長頭巾を頂き、長寛な下裳と黒色の靴を着し、官府と會見するときには禮遇

されたという。ここで注目されるのは、まず糧長の服装である。糧長頭巾は、糧長たるの地位をとくに表示する頭巾にはかならず、里長戸その他の一般農民との差違を強調するものであろうが、早鞆は官僚の着するものであった。「曆大明會典」^{卷六}禮部十^九冠服二文武官冠服《公服》には、

洪武二十六年定文武官公服。……靴用早^④。

とあり、早鞆とは文武官の公服であり、同條の《士庶巾服》には、

（洪武）二十五年令。文武官同籍父兄伯叔弟姪子壻。及儒士生員吏典知印承差。欽天監天文生。太醫院醫士。瑜珈僧。正一道士。將軍散騎舍人帶刀之人。正五馬軍并馬軍小旗。教讀大誥師生。許穿靴。校尉力士。遇上直許穿。出外不許。其庶民商賈技藝。步軍及軍下餘丁。管步軍總小旗官下家人火者早練伴當。在外醫卜陰陽人。皆不許。止許穿皮札鞆。其北平・山西・山東・陝西・河南并直隸徐州地寨人民。許穿牛皮直縫靴^⑤。

と言われて、文武官同籍の血縁者、儒士・生員などを除く一般庶民は靴そのものの着用が許されず、ただ皮靴の使用が認められていた^⑥。これらの點からすると、糧長は官僚、ないしそれに準ずる地位の人と同様な服装をしていたとみられるが、外出時の乗輿などについても同様の事情が確認される。「皇明條法事類纂」^{卷一}五刑類・職官有犯《禁約散官違法・禁豪強以免民患》には、

成化十五年二月二十五日。禮部等衙門爲建言民情事。……計開 一件。禁約冠帶散官違法。各處上馬納粟冠帶榮身散官。多有不知法度^{（マ）}。恣意妄爲違式起蓋廳堂。僭用器物。其至謀充糧長。出入騎馬。役使貧民。扛擡四轎^⑦。腰束銀帶。張打涼傘。前擺銅羅叉鎗藤棍。下鄉催糧。

とあり、また同書^{卷一}五刑類・五刑にも、

弘治七年九月二十七日。刑部等衙門太子少保尙書等官白 等題。一。去羽翼以抑豪強。切見。江南地方有等豪富之家。或奉例納粟冠帶。或自祖充當糧長。專持己富^{（マ）}。不遵國法。出行之際。陸路則涼漆傘轎。前持後擁。水路則樓紅轎。左擺右列。

とあって、糧長出行の際には騎馬もしくは轎を用い、日除けの大傘を翳して前後に武裝した供廻りを従えるというものであったが、「四友齋叢説」卷三「正俗」二は、

嘗聞長老言。祖宗朝。鄉官雖見任回家。只是步行。憲廟時士夫始騎馬。至弘治・正德間。皆乘轎矣。

と述べ、現任官の歸郷の際にも當初徒歩であったものが、成化年間に騎馬となり、弘治・正德には乗轎するに至ったというが、ほぼ同時期の糧長が騎馬・轎を用いているのは、こうした官僚と匹敵するような社會的地位を保持していたことを示すものであらう。

さらに官府と會見する際に禮をもつて遇せられたとは、官僚相互間の身分的格式に準ずる待遇を與えられていたことを意味するが、同様の記載は他書にも散見される。倪謙「倪文僖公全集」卷六「單處士輓詩序」は、

處士（政友）世居撫之臨川。……饒於實業。郡守以其家殷行憚。伸長萬石。處士勤以事上。公以駁下。征輸先時而集。民戶恬不知擾。用是郡邑長吏咸禮遇之。

と述べ、同書卷十「義官梅軒華公墓碣銘」には、

公諱佐。字全亮。姓華氏。……邑長吏舉督區賦。仁恕公平。……時巡撫工部侍郎周公既知公端介。命爲總收。深加禮待。

とあり、吳寬「匏翁家藏集」卷七「隆池阡表」には、

惟沈氏之先皆葬其里相城。……聞昔正統間。周文襄公以工部尚書巡撫畿內。慨然以經理國用爲己任。戒郡縣。慎選長田賦者。處士（沈恒）在選中。公知其賢。待之不_レ以庶人禮。

と言われ、嚴訥「嚴文靖公集」卷九「明故處士怡東顧君暨嗣室陸孺人墓表」にも、

君諱早。字希寅。怡東其別號。……君席先饒產。歲長鄉賦。……君旣彰有賢聲。邑令而下爭禮貌之。

とあるのは、いずれも「庵村志」の記述を裏付けけるものであらう。

以上によれば、糧長は明代社會において官僚に準ずるような身分的地位を保持していたこととなり、「天海鹽縣圖經」

卷六 食貨篇下役法に、

父老相傳。古有大糧長。^①聲勢赫奕如官府者是也。

と、また「^②萬曆嘉定縣志」卷六 田賦考中徭役に、

蓋高皇帝念賦稅關國重計。凡民既富方穀。乃以殷實戶充糧長。督其鄉租稅。多者萬石。少者乃數千石。部輸入京。往往得召見。一語稱旨。輒復拜官。當時父兄之訓其子弟。以能充糧長者爲賢。而不慕科第之榮。……至嘉靖中。爲抑強扶弱之法。糧長不獨任大家。以中戶輪充。初輪充者如得美官。

と傳えられているのは、上述のような糧長の地位を示すものにはかならない。

そしてまた同時に、これら糧長はしばしば自ら經史詩文の素養を備え、家塾を設けて子弟に儒學の訓育を施し、嚴格な家父長主義の下に一族を統制するとともに、あるいは書畫骨董を蒐集し、花園別墅を營み、當地出身の官僚、また文人・墨客などと交遊して社交的宴會を催すなど、その生活様式の面でも官僚層に類するものがあつた。たとえば、宋濂「宋學士文集」^③卷七 上海夏君新壙銘は、上海縣糧長夏宗顯につき、

兄及孀姊老而窶。歲時奉粟帛養之。葬其喪而卹其子。撫異母弟有恩。事外舅姑盡子壻禮。聘名士爲師。故人子就學者飲食之。且則冠帶坐堂上。子孫盛服入。揖立兩序。俯首聽教命。君各授以事。會食遣去。至夕取古今事可爲法戒者。辨說諸說。勉以爲善。

と述べ、一族の撫養とともに家塾に「名士」を聘して子弟を訓育し、毎朝會食時には正裝して家族に教命を與え、夕にも古今の事例を引いて教誨したと言われ、常塾縣糧長徐訥の傳を述べた吳寬「匏翁家藏集」^④卷五 徐南溪傳には、

率其僮奴服勞農事。家用再起。以治家非。衣食雖足。祇益爭鬭。若江陰嚴志道。同邑計蒙正皆閑於禮者。相與爲友。事多請而行之。

閨門之內嚴而有法。凡釋道巫覡一切屏絕。特采江州陳氏・臨川陸氏・浦江鄭氏家範之可行者。合百七十餘條爲一編。又取古之同居者爲集。都御史思菴吳公・修撰止菴張公序其首。以示子孫。俾世守之。又作堂曰崇禮。每旦夫婦同坐堂上。子孫及諸婦序立堂下。拜訖。公大聲曰。毋聽婦言。皆應曰諾。復令少者讀孝弟事實。數章而後退。如是者蓋四十餘年。……迨老猶善讀史。上下數千年事。與

人評論如指諸掌。

とあり、徐訥は江陰の嚴志道、同縣の計蒙正等と禮を講じ、江州陳氏、臨川陸氏、浦江鄭氏の家範を採って自ら家訓を編し、前代累世同居者の事蹟を輯め、每祠堂前に家族を集めて訓誨を與え、またとくに史書に親しんだという。史鑑「西村集」^{卷八}行狀《先考友桂府君行狀》は、吳江縣の糧長であつた父史珩について、

日取諸書課讀。雖甚冗不廢。間從明師友相質問。凡有關倫理。則默識思踐行之。節章繪句之習。一不加之意也。又善記資治通鑑。論上下數千年間治亂賢不肖。如指諸掌。……關家塾。延周伯器・夏原善主之。命鑑從之。遊里中來學者不計也。

と傳え、讀書に努めるとともに章句よりも倫理の實踐を重んじたと言われ、「資治通鑑」を好み、その家塾には來學するものが多かつたとある。これらの記述に示される家父長主義的リゴリズム、倫理主義、「資治通鑑」など史書への嗜好などからは、宋學、とくに南宋以來の朱子學＝道學の影響が窺えるが、江西南昌縣の糧長萬英の傳を述べた舒芬「梓溪文鈔」^{卷七}外集松竹主人西溪萬公墓誌銘には、

自少嗜學。同舍生多忌之。輒匿燈。伺衆寢默觀。至長益潛心性分之學。以聖賢爲必可師。窮理致知。克服紫陽之訓。知禮成性。早入橫渠之門。平生修整。步履有定。則嬉笑俚近之語。未嘗出諸口。

とあつて、萬英が「性分之學」に潛心し、紫陽すなわち朱熹、張橫渠を學んだと述べ、呂原「呂文懿公全集」^{卷十}明故處士聶君合葬墓誌銘は、吉水縣糧長聶正につき、

性嗜學。於經史子籍多所涉獵。……凡冠婚喪祭。悉遵晦菴先生家禮。尊賢好士。與儒紳恒相往。談道講理。商榷古今。又於所居東偏置家塾一區。

と言ひ、朱子の家禮を尊重したというのは、いずれも宋學の影響を明白に物語っている。また鄭文康「平橋藁」^{卷十}王克信墓誌銘は、崑山縣糧長王克信の傳を述べて、

雅好儒術。刑部主事盧克修其內人之外弟也。攻古文辭。得六書法。克信一入城。卽從討論講說。以故誦詩書。道古今。綽有文彩。崑

之縉紳郡縣長貳。成熟其賢。

と傳へ、吳寬「匏翁家藏集」^{卷七}一 姜正術墓表に、

君幼嗜學。務汎覽載籍。尤善爲詩。

とあるのは、ともに糧長の儒學詩文の素養を示すものであらう。

さらにまた倪謙「倪文僖公集」(「武林往哲遺書」本)^{卷二}七 故竹隱盧公暨妻包孺人墓表には、

竹隱公諱成甫。字文義。姓盧氏。吳之舊族也。……閑居以經史自娛。雖佛老醫卜之書。亦皆博涉。好蓄古法書名畫。縉紳多與交往。

至輒出求賞鑒。所得評跋翰墨爲多。……委督區賦。民相戒曰。不可以吾輩事累長者。爭先完納。無敢後。

とあり、吳縣糧長盧成甫は經史佛老醫卜の書に通ずるとともに、書畫を蒐集して「縉紳」と交際しその賞鑒に供していたが、鄭真「榮陽外史集」^{卷四}七 貞一居士傳にも、鄧縣糧長韓常について、

家居無嗜好。惟購法書名畫及古彝器。以資後人盛觀。

と言われており、その他官僚・文人・墨客などとの交遊社交については、長洲縣糧長沈恒以の墓表たる吳寬「匏翁家藏集」^{卷七}〇 隆池阡表に、

自其少時。與其兄真吉同學于家塾。而塾師爲翰林檢討陳祠初先生也。且其父徵士好客。一時名流相過。從者日常滿坐。處士因盡得接

見前輩。……所居窗几明潔。器物古雅。而奇石嘉樹。掩映庭廡。儼如畫中風日清美。每被古冠服。登樓眺望。神情爽然。或時扁舟入

城。留止必僧舍。焚香瀹茗。爨夕忘返。善繪事。妙處逼宋人。然自重不苟作。亦善爲詩。落紙可誦。平生好客。綽有文風。日必具酒

肴以須客。至則相與劇飲。雖甚醉不亂。特使諸子歌古詩章以爲樂。

とあって、沈恒以の家は長洲縣の「大家」であったが、年少時より家塾を中心に「名流」と交り、居室には名器奇石嘉樹を集め、自ら繪畫詩作をよくし——因に、沈恒以は畫家として著名な沈周(石田)の父である——、客を好んで至れば劇飲して遊宴したとあり、同様のことは金壇縣糧長徐恣の傳を述べた倪謙「倪文僖公全集」^{卷十}九 訥菴處士徐公墓誌銘にも、

性不嗜酒。然遇佳客勝士。輒觴酌爲飲。常攜一室。儲琴書壺奕其中以自適。外列泉石花卉。以擬林園之勝。

と傳えられ、張寧「方洲先生集」^{卷二}一義官力本許公墓誌銘は、海鹽縣糧長許紉の父頑につき、

久之子紉爲賦稅長。乃營別業。日以詩酒琴奕自適。

と、また許紉については同書^{卷二}四一許一樗墓誌銘に、

晚年舉全業各授諸子。退處一樗小軒。……軒之內外列置圖史。其外雜植花卉。樂與故人親戚觴詠其間。

とあり、吳寬「匏翁家藏集」^{卷六}二陸宗博墓誌銘は、長洲縣糧長陸溥の傳をつたえて、

其年始四十。卽邑中治別第。將謝家事。日從賢大夫。開尊俎。閱書畫。以爲樂。

と述べ、葉盛「涇東小稿」^{卷四}四序《許翁德器挽詩序》は、崑山縣糧長許瓚について、

然富而惇禮。能讀書。能延師教子。邑有耆儒沈同菴先生。主其家塾者最久。頗記往年張子兄弟如前提學憲使篠菴君。今大參勿齋君。

又如同菴母弟福建憲副君。皆未有官。而予往往得相從過翁家。翁未嘗不留飲。凡茶筍之供。酒脯之設。皆指顧爲之楚楚然。座客生

敬。

と、また華亭縣糧長胡清の墓銘たる顧清「東江家藏集」^{卷三}〇友竹處士胡君墓誌銘にも、

晚年康健。日以教子孫。務耕讀爲事。暇則招賓客。觴豆嘯咏。以樂太平。

と述べられており、總じてこれら糧長の日常生活上の趣向、交遊關係が官僚層のそれと同質の内容を持つものであり、先の經史詩文の素養、子弟の訓育、一族への家父長的統制に示された顯著な道學的傾向とともに、この糧長層の存在が當時の支配層間における江南文化を支えた社會的基盤をなしたものと言えよう。

以上によって、明代前半期までの糧長が、社會上の格式においても、またその生活様式においても、ほぼ官僚層に準ずるような地位を保持していたことを明らかにしえたと思う。④そしてこのことは、官僚登用のための科擧制度が行なわれていたにもかかわらず、科擧體系の枠外にあって「處士」として存在した糧長層と官僚層とが、社會層として明確には分化

しておらず、共通の社會的身分を構成していたことを物語るものであるが、この點は糧長と里長戸およびその他の一般農民との關係においてさらに明らになる。

先の「庵村志」の記述にもどると、(B)では里排、すなわち里長戸が糧長と會うときには佇立したまま坐ることができなかったとあり、また(C)によると、糧長の家中には「卓圍公座」と刑具が備えられて、公文書をもって身柄を拘束することができ、日限を定めて里長戸を催督すること官府のごとくであったという。この「卓圍公座」と刑具・硃票が鄉村裁判にあつても適用されたことはほとんど疑いないが、これらの點からすると、糧長と里長戸との間には劃然たる身分的差異が存在したと云えよう。「聲勢赫突たること官府のごとし」と傳えられ、「明實錄」宣德六年四月癸亥の條に、

監察御史張政言。洪武間設糧長。專辦稅糧。近見浙江嘉湖。直隸蘇松等府糧長。兼預有司諸務。……甚至役使良善。奴視里甲。と、また汪循「仁峯先生文集」^卷十保竹余處士墓誌銘に、

處士余君以正德庚午正月十六日卒。……祖公順公身貌頎偉。儒涉吏事。國初以才貌辟。親老辭不起。考定廣公嚴重有威。俗尙豪右。公自負智能爲區賦長。不與鄉人齒。

とあるのは、里長戸および一般農民に對する糧長の地位を示している。そしてさらに興味をひかれるのは、(D)の部分に、嘉靖中年に及んで糧長の地位は次第に低下し、現在では里長戸と糧長との間に身分的差異がなくなったのみならず、里長管轄下の一般農民と里長戸とも對等關係となり、毫も「尊卑」の別がなくなった、と言われていることである。この記述によれば、嘉靖中年以前には糧長と里長戸および一般農民との間だけではなく、里長戸とその管下の一般農民との間にも「尊卑」の別があったこととなり、里甲制を軸とした鄉村社會では、糧長—里長戸—一般農民という三段階の身分階層が存在したことになる。この中、糧長と里長戸および一般農民との關係は前述したので、里長戸と一般農民との關係を検討してみる。

「康熙感縣志」^卷五風土考《習俗》には、

里有排年里長。甲有甲首花戸。故老傳。洪・永間。里排衣綺黻。設竹板。到花戸家。坐上坐。徵催用刑。花戸不敢與齒。近來里排窮落。舊制無聞。

とあり、洪武・永樂年間には里長戸は絹衣を着し、刑具を備え、その管轄下の農民の家にゆくと上座にすわり、税糧の徵收には刑具を用いていた、そして農民は里長戸と對等の格式では相對せなかったが、近頃では里長戸のそうした地位は低落し、里長戸と一般農民との間の昔のような關係はなくなっている、と言われている。ここでは明らかに、「花戸不敢與齒」とあるように、里長戸と一般農民との間の身分的格差の存在したことが語られているが、これは湖北の孝感縣においてのみではなく、河南歸德府寧陵縣の人呂坤の「去偽齋集」^{卷五}書啓《上巡按請申明條鞭舊法》にも、

二曰十排之累。十排里長也。視花戸爲尊。

とあって、里長戸は一般農民にくらべて「尊」と言われており、北直隸の「^{嘉靖}南宮縣志」^{卷一}地理志《里甲》は、

國朝制以十戸爲甲。十甲爲里。是爲一社。里設一長。十年一役。周而復始。……成化・弘治間。必里中有行義者。衆共推爲長。人亦以得與里長爲榮。今皆苦於誅求。輒受箠笞榜械之辱。微知自愛者。必百計祈解。

と述べ、成化・弘治年間には里長戸になることを榮譽としたとしているが、これらはいずれも里長戸と一般農民との間に身分的格差の存在したことを伝えるものである。こうした身分的格差の存在は、陳益祥「采芝堂文集」^{卷十}文類に、

四民之品。商爲最下。……里長者編戸之主也。

とあって、里長は「編戸之主」とされていること、國子監在學中の監生も、その家が里長にあてられると歸郷して當役していること、^⑤「御製大誥續編」民擅官稱第六十九には、

朕自馭宇以來。民有無官稱官者。往往皆然。……爾庶民擅官稱。官稱且無賴。豈不由是而根禍。朕諭之後。鄉民有曾充糧里甲者。則以糧里甲稱。非糧里甲。則以字稱。

とあって、糧長とともに里長も役名を稱呼するのに對し、その他の庶民は字をもってせよとされていることなどから

窺えるのであるが、さらに里長は、糧長と同様にその地位を示す特定の服裝をしていたと思われるのである。前引の「康熙
孝感縣志」にも「衣綺黻」とあったが、駱問禮「萬一樓集」卷五「續羊裘集九鐘山詩」には、

我邑楊維禎元進士也。官至江西提學提舉。阻兵隱於松江。見太祖高皇帝於富塗。太祖異其冠服。對曰。四方平定巾。海晏河清服也。
太祖喜。遂頒行之。今各州縣里長・老人所載。及大夫士所服細褶衣是也。

とあり、郎瑛「七修類稿」卷十「國事類《平頭巾・網巾》」の項も、

今里老所載黑漆方巾。乃楊維禎入見太祖時所載。上問曰。此巾何名。對曰。此四方平定巾也。遂頒式天下。

とほぼ同趣旨のことを述べている。この中、楊維禎に關する逸話はもとより信用しがたいものであり、また前述のように平定巾は庶民の頭巾とされており、現に里長や老人が着していた「黒漆方巾」がこの平定巾に當るかどうかも疑わしいが、糧長が糧長頭巾を頂いていたのと同じく、黒漆方巾が老人とともに里長の地位を示すものであったことは疑いない。

また「禎壽寧待詔」卷上風俗には、

吏與生員。人俱呼爲相公。書手稱先生。衙門以吏爲尊。私或帶晉巾。與儒生齒。用扇亦有分別。詩畫扇・薰金扇。惟生童與吏書得用。坊里見年等用本省畫花白扇。門卑輩止用銅箔油扇。若蘇・杭眞金扇。雖薦紳大家間有之。無輕用者。

とあり、使用する扇に段階的な差異があったが、この差異は個々の人の貧富によって一義的に規定されているのではなく、換言すれば、富家であればどのような扇を用いてもよいというのではなく、それぞれの占める地位によって決められていたのであるから、坊長・里長が福建産の「畫花白扇」を使用していたのは、これが坊長・里長の地位を象徴しているからであって、この點もまた里長が一定の社會的身分を構成していたことを示すものと云えよう。

以上述べてきたところからすれば、明代の鄉村社會は、大別して糧長―里長戸―一般農民という三種の身分序列より成立っていたことになるが、この序列が鄉村統治系統―賦・役徵收機構とかさなっていることは明白であり、賦・役徵收機構すなわち役法の體系がそのまま社會の身分序列を規制する機能を果し、役法體系の中でどの位置を占めるかが、その家

の社會的身分を格付けていたと考えられるのである。そして糧長層は官僚とほぼ同一の社會層を形成しており、この官僚と糧長層が明代社會の支配身分を構成していたと云えるであろう。⁵⁵

五 結 語

以上、明代前半期の江南デルタ地帯を中心として、糧長の諸側面を検討してきたが、それを要約すればつぎのようになる。

一、洪武四年に初設された糧長は、秋糧一萬石を基準に設置された倉庫の管理を中心に、秋糧の收納、その解運を主要任務としたが、洪武十八年復活後においては、元代以來の鄉村行政區劃たる都を基準とした區を單位に設けられ、この區は縣と里との中間に位置する明確な行政區劃となり、糧長は區の管轄を通じて鄉村行政系統の中に位置づけられることとなった。

二、區内における糧長の機能は、從來より指摘されてきたような區内稅糧の徵收・解運のみならず、徭役科派をも掌り、明代國家の基本的收取内容たる稅糧・徭役兩者の科派・徵收を掌握していた。

三、こうした區内における稅糧・徭役の科派・徵收を確保するため、糧長は排解をも含めての鄉村での裁判權の行使をはじめ、「農功を督す」と言われるような種々の勸農事業の責任も負わされていた。その第一は、種子・農具・勞働力の按配、作物・施肥・收穫などの農法指導であり、第二に、これらを通じての區内耕地の維持、未墾地の開墾および被災田・抛荒田の調査・除豁であるが、第三に、とくに重要なのは、糧長とその管轄下の里長を中心とした水利機構の組織である。これは單に臨時的に行なわれた大規模な浚渫・築堤の場合だけでなく、とくに圩田地帯の農業再生産の必須條件であった日常的排水作業も、糧長―里長という鄉村行政系統に賦・役徵收機構により組織され、また龍骨車・桔槔などの灌排水用具の主要具備者たる糧長・里長層を賦・役徵收機構に編成することにより、この機構そのものが農民經營の再生産

を媒介する共同體機能を併有し、これを通じて國家の鄉村支配が維持されていた。

四、右のように、糧長は區内行政のほとんど全局面を統轄して、「鄉政を掌る」と傳えられるように、明代國家の鄉村統治の上で中核的地位を占めていたが、このことは、明代社會の身分構成の中での糧長の地位にも示される。糧長は、社會的な格式においても、日常の生活様式においても、官僚層と共通する一つの社會層をなしており、里長戸やその他の一般農民に對して官僚に準ずる劃然たる地位を保持し、官僚とともに一つの支配身分を構成していた。そしてまた、里長戸と一般農民との間にも「尊卑」、「不敢與齒」と言われる身分格差が存在し、明代社會の身分序列は、大別して官僚・糧長層—里長戸—一般農民の三段階に格付けされていたと云える。この三段階の身分序列が、鄉村行政系統—賦・役徵收機構に對應したものであることは明白であり、賦・役徵收機構、すなわち役法の體系がそのまま社會の身分序列を規制する機能をも果していたと考えられるのである。

以上の諸點を一應の前提とすれば、明代國家の支配體制は、賦・役徵收機構であるとともに、共同體機能と社會の身分序列の規制とを同時に結合していた、里甲制を土臺とする役法體系を基軸に構築されたものであり、したがって、この役法體系の全面的な變化の現われる明末清初期は、共同體機能の在り方、社會の身分構成の變動——前述の諸史料が語るように、明末清初期には糧長・里長・一般農民相互間の身分序列は解體されつつあった——をも含む國家の支配體制の構造的轉換期と想定しうるのではなからうか。

なお本稿では、糧長の土地所有の内容、商業・高利貸資本としての面には觸れえなかったし、また明代社會の身分構成の中での佃戸・奴僕・賤民などの占める地位についても言及できなかった。これらの諸點については更めて検討する機会をえたいと思う。

註

① 吳晗「明代之糧長及其他」（雲南大學報二、一九三九年）、

星斌夫「明代糧長の漕運に於ける役割」（山形大學紀要人文科學一・一九五〇年、同「明代漕運の研究」一九六三年、第三章

所收)、川瀬智壽子「明代の糧長」(文化一七六、一九五三年)、梁方仲「明代糧長制度」(一九五七年)、西野正次「明代太湖周邊の糧長——特に蘇州府吳江縣を中心として——」(金澤大學法文學部論集・哲學史學篇七、一九五九年)、山根幸夫「明代徭役制度の展開」(一九六六年)。

② 「明實錄」洪武四年九月丁丑の條に、

上以郡縣吏每遇徵收賦稅、輒侵漁于民。乃命戶部。令有司料民土田。以萬石爲率。其中田土多者爲糧長。督其鄉之賦稅。

とある。

③ 「正大明會典」^{卷三}戶部二倉科・徵收一稅糧に、

(洪武)十五年。革罷糧長。徵收糧令照黃冊里甲人等催辦。

とある。なお「皇明詔令」^卷二洪武十五年五月の條參照。

④ 「明實錄」洪武十八年七月癸丑の條に、

復設糧長。以民戶糧多者爲之。

とある。なお糧長の設置された地域として確認しうるのは、南直隸、浙江、江西、湖廣、福建の諸地方であるが、「明實錄」景泰五年五月甲戌の條には、

革湖廣所屬州縣糧長。時湖廣按察司言。糧長收糧。民受其害。請將各屬正副糧長盡行革去。稅糧里甲催徵。仍請移文各處推檢。如果無益于事。有損于民。奏請罷止。從之。

とあり、同じく景泰六年三月丙辰の條には、

巡撫淮安等處左副都御史王竑奏。江北直隸揚州等府縣糧長。往往科害小民。乞准湖廣例。盡數革罷。糧革令官吏里

甲催辦。從之。

と、また同景泰七年七月癸巳の條には、

巡按福建監察御史盛頤奏。近與布按三司會議。福建地方依山濱海。田糧數少。原設糧長。有損於民。無益於事。應合革罷。以後稅糧令各屬里甲催徵爲便。事下戶部覆奏。從之。

と述べられて、景泰年間には、湖廣、南直隸の揚子江以北、福建では糧長が廢止された。揚子江上流の四川については、「^曆萬四總志」^{卷一}「經略志」^卷「財賦」に、

蜀中舊不設糧長。但歲推股實戶爲總部。倉各一人。催督納取通關號紙。

とあって、もともと糧長は設けられていなかった。また廣東については「^萬瓊州府志」^卷五雜役に、

郡中役色。有不係正差而以正用者。率有數種。曰該徵糧

長。以催徵錢糧用。^{里甲當年後。入冬即催該里錢糧上納。應解京師。廉糧者就選丁糧長相應三戶充之。}

とあり、「^萬儋州志」^卷天雜役にも、

糧長。舊例當里長之後。入冬即充糧長。催徵該里錢糧。上納其起運糧銀。就中推選丁糧長上三戶爲之。今俱實里長。

とあって糧長の語が見えているが、この場合には、見年里長の中より選ばれたものが起運糧銀を上納するもので、後述するごとき區を管轄する糧長とはその内容を異にするものと言うべきで、むしろ特定稅物の解納に當った解戶にあたるものである。「^嘉惠州府志」^卷五戶口志には、

正役曰坊長。曰廂長。曰里長。曰甲首。……曰解戶。^{此里長之正役也。}とあるのは、以上の點を裏書きするものであらう。

⑤ 歸安縣糧長の記事の中では、「本縣該糧一十萬六千四百餘石。計正糧長一十七名」とあるが、この一十萬六千四百餘石が一十七萬六千四百餘石の誤りであることは、洪武十年秋糧額と正糧長數に照して明らかである。

⑥ 德清縣の正糧長が十名となることは、山根前掲書六四頁（註一〇四）参照。

⑦ 冒頭の湖州府全般の糧長制につき述べた部分および歸安縣の條に「建倉於鳳陽府。歲收秋糧。自令出納」とあり、これからすると、この秋糧一萬石ごとの倉は鳳陽府に建てられたもののようにも讀める。糧長によつて鳳陽府に倉の建設されたことは、「明實錄」洪武四年十二月丁未の條に、

勅戶部。命糧長建倉于臨濠。

とあるように事實であり、これは洪武二年より八年までの間、鳳陽を中都として經營しようとしたことと關連するものであらう（吳晗「朱元璋傳」一九四八年、一七八―七九頁參照）。しかし、この秋糧一萬石ごとに糧長とともに設けられた倉は鳳陽に建てられたものを指すのではなく、湖州府下各縣に設置された倉である。武康縣・安吉縣の條に、秋糧一萬石有奇にもかかわらず、「山鄉遼闊」、「山鄉寥遠」のため、ともに糧長七名、倉七を設けたとするのは、この倉が各縣下に建てられたことを物語る。

⑧ 副糧長設置の年次および副糧長數が「明實錄」の記載と喰違う點は山根前掲書（五八頁）參照。

⑨ 元代の鄉村統治機構については、梅原郁「元代差役法小論」（東洋史研究二三―四、一九六五年）參照。鄉村行政區劃とし

ての都は王安石の保甲法に淵源し、南宋より元代にかけて華南・華南の地域に鄉都制として定着してきていた（周藤吉之「南宋鄉都の稅制と土地所有——特に經界法との關聯に於いて——」（『宋代經濟史研究』一九六二年所收）參照）。

⑩ 區の設置されていない都は、恐らく立地條件が劣惡で、糧長に當るべき有力な家の見出しがたい地域であつたと思われる。

況鍾「明況太守龍岡公治縣政績全集」九卷請禁妄動實封及冒軍籍冒船戶僉充糧長不符定例諸奏（宣德九年五月）には、

一件僉替糧長事。先奉戶部勘合。仰各將糧多股實服衆大戶。永充糧長。近查長洲等縣稅糧不完。究其所以。蓋因下等水鄉艱難區分。原無股實大戶。俱係一般小民編充糧長。不能服衆。

とあり、水鄉艱難區分では糧長に當るべき股實の戸がないと言われている（梁方仲前掲書、八九頁參照）。なお一縣下において糧長の設けられない都分があつただけではなく、一般に糧長の設置された地方においても『萬寧國府志』八卷食貨志に、國制。凡夏麥秋糧馬草。量縣設區。宣城十五區。南陵三區。寧國三區。涇四區。旌德三區。太平糧少不設。とあるように、稅糧額の少ない縣では糧長の置かれなかった場合もあつた。

⑪ 「萬寧定縣志」の同條は、按每區復分正副屬。其謂之屬者。正副糧長割地管轄。各立簿籍一屬故也。

とし、區内二名の正副糧長の管轄地域が分割固定化されて屬となつたとしている。十五都、畸零二都の半區一屬とは元來糧

長が一名のみ置かれていたのであろう。吳江縣の二九都は四區一扇とされ糧長は九名となつてゐるが、第二表に見るように每區糧長二名が置かれてゐるから、この一扇には糧長一名が設けられたこととなる。「治吳江縣志」^卷二郷都によれば、二一九都は四區とあり、したがつてこの一扇は弘治より嘉靖の間に増設されたものである。

⑫ 松江府下の各縣では、郷一保一區一里の系列となつており、都の名はないが保が都に相當するものであろう。

⑬ 第一西南區に遊僊三十三半、合德三十三半とあるのは、遊僊郷に屬する三十三半都、合德郷に屬する三十三半都のことで、三十三都は、地域上の區劃としては遊僊郷と合德郷に分屬されてゐたのを、區を設置するにあつて、遊僊郷に屬する三十三半都と合德郷に屬する三十三半都を一括して第一西南區の統轄下に置いたことを示す。他の半都の場合も全て同じである。ただ、第二東北區に太平三十三半、遊僊三十三半とあるのは、太平郷には三十三半都はあるが三十三半都はなく、遊僊郷の三十三半都はすでに第一西南區に見えており、また遊僊郷下には三十三半都があるから、この太平三十三半、遊僊三十三半は、太平三十三半、遊僊三十三半の誤記であることは疑いない。

また同じ金華府下でも「正蘭谿縣志」^卷一風土類々郷隅では、

第一東一區 管僊三十 都三十一
都糧稅 西二區 管僊二十 亦分屬
都糧稅 東二區・東三區 湯溪縣 西一區 九都三十

第二東南區 管僊十五都二 東北區 管僊十三都十四
都糧稅 都二十都糧稅 西南區 管僊二十五
都糧稅 西北區 管僊二十都糧稅

第三東南區 管僊十八都 東北區 管僊十八都
都糧稅 十九都糧稅 西南區 管僊二十七都
都糧稅 二十八都糧稅

西北區 管僊二十六都
都糧稅 第二東南區 管僊十一都十六
都糧稅 東北區 管僊八都九都
都糧稅 西南區 管僊十二
都糧稅 西北區 管僊六都七都十
都糧稅 第五東南區 管僊三十三都
都糧稅 東北區 管僊八都九
都糧稅 西南區 管僊三十二都
都糧稅 西北區 管僊十五都糧稅 第六區 管僊一都二都三
都糧稅 都四都五都糧稅

とあつて、多くの都を二區に分屬させてゐる。なお湯溪縣は成化七年に新設された。

⑭ 十七都が三、四兩區に見られるのは、三區には十七都一・二・三・四・六番が屬し、四區には同都五・九・十・十二番が屬するからである。一都で二區に現われるのは全て同様の事情による。

⑮ 「明實錄」嘉靖十年五月戊戌の條に、

行人朱隆禧以齎詔南直隸各府還。上所過利病事。……二。慎催科。謂東南諸郡賦役繁重。糧長之役。宜如舊制。每都照額僉審。不許額外添僉。

とあり、明末清初の人曹煒の「宛村志」^(在吳江縣)風俗の項には、明初糧長責任甚重。……每都點僉一名。糧銀俱取足於糧長。

と述べられ、「嶺海昌外志」^卷二食貨志《徭役》に、各都有糧長。主收二稅。

と、また「康熙石門縣志」^卷二紀疆《賦役》に、明設法。每里編定里長十名。……各都有糧長。以徵收二稅。

とあるように、糧長設置が都を單位としたかのごとく述べる記述が見られるのは、糧長、またその設置單位たる區が、都を基

準としたことを示すものであらう。「御製大誥三編」臣民倚法爲姦第一では、太祖自身が、

本以大戸爲糧長。掌管本都鄉村人民秋夏稅糧。

と述べている。

⑮ この扇書が一區に對して二名置かれたのではなく、各糧長に一名づつ配屬されたことは、二九都四區一扇の糧長九名に扇書九名があてられていることから明らかである。そしてこのことは、嘉定縣の場合に每區正副二扇に分たれ、各扇が正副糧長の固定管轄區域となっていたように、吳江縣でもすでに每區に二名設置された糧長の管轄區域が分割固定化されつつあったことを示すものであらう。

⑯ 經催は、嘉靖期以降里長の職務内容が分化し、それぞれ獨立の役目となるにつれて現われたもので、元來里長の職務であった稅糧の催督に専らあたった。栗林宣夫「明代後期の農村と里甲制」(東洋史學論集四、一九五五年)、山根前掲書(一四四頁以下)参照。

⑰ 縣總書算は、縣總と書算の二つに分けても讀めるようであるが、同じ「靖吳江縣志」^卷九食貨志一土田の項には、縣志編者の「徐師曾曰」として、縣下田土の錯亂が甚しくなり、生員・耆民等の間で「衆論洶洶」となってきた事情を述べた文中に、

當時掌數之人爲總耆徐福・總書陸鏤。

と總書の語が見え、これは縣總書算の略稱かと思われるので、縣總書算を一役目として理解する。

⑱ 嘉興府崇德縣は、康熙元年に石門縣と改名された。

⑲ 洪武十五年以前において、糧長が秋糧のみならず夏稅の徵收

をも行なっていたことは、「明實錄洪武十五年九月乙未の條に、

糧長有徵民夏稅。匿絹入己者。刑部以監守自盜論。齎勘司令前綸駁之。謂糧長因徵夏稅匿人絹。非盜在官之物。據律條。宜以因公科斂財物入己論罪。刑部所咥太重。奏入。上從綸議。

とあるのによつて明らかであるが、「吳興續志」に伝えられるように、糧長が秋糧一萬石を基準とした倉庫に附設され、この倉庫の管理を主な職務内容としたことは、秋糧の徵收・解運を確保することが國家より期待された糧長の中心任務であり、その受待つ收糧範圍が縣下の鄉村統治系統の中で一定の行政區劃としての地位を確立していなかったことを示すものであらう。

これに對して區が元代以來の鄉村行政區劃としての都を基準に設定され、糧長が區内の夏稅・秋糧全體に責任を負わされるようになったことは、糧長設置單位としての區が縣下の鄉村行政區劃として位置づけられ、糧長が鄉村行政系統の中に明確に組込まれてきたことを意味する。華北において稅糧の收納・解運にあたつた大戸は、しばしば糧長に比定されているが(梁方仲前掲書五四・五五頁、山根前掲書六二頁)、「萬兗州府志」^{卷十}戸役志に、

舊時徵派稅糧。卽選殷實之家僉充大戸。分定廠口。使之坐收。

と言われ、「明實錄」隆慶四年八月丙午の條には、

巡撫山東都御史梁夢龍等條上賦役三事。……一正分守分解之規。言往者編僉大戸。分定倉口。

とあり、于慎行「穀城山館文集」^{卷三}與撫臺宋公論賦役書に、

舊時徵派稅糧。預選殷實之家充大戶。列肆自收。完日各照版口給批自解。

と述べられているように、大戸は糧長と同じように税糧の收納・解運にあたつたが、その設置は納入すべき倉庫を單位としてであつて、梁方仲氏もすでに指摘しているように、區のような縣下の行政區劃を管轄したものではない。その點では洪武十八年以後の江南の糧長とは明らかに異なるのであつて、むしろ洪武十五年以前の糧長と同性質のものと言えよう。

②① 同縣志^{卷六}「官師考下」によれば、李資坤が嘉定縣知縣であつたのは、嘉靖十二年より同十五年までである。

②② 掣尖冊は、「^萬常州府志」^{卷六}錢穀三徵輸に、

萬曆元年督糧參政舒化議。吳中冊籍有黃冊・青冊・白冊・掣尖冊・丁田冊・紅硃比較冊・實徵冊。

とあるように、江南では廣く造られていたようである。嘉定縣志の記述からすれば、掣尖冊とは、人戸をその資産の多寡によつて上戸より下戸への順序で書出し、均徭内の各役目を重役から輕役へと各戸下に割當て記入した冊籍で、普通均徭冊と言われるものと同種のものであろう。

②③ 「四庫全書總目」^{卷六}五・史鈔類存目には、

宋史存二卷。明文德翼撰。德翼字用昭。德化人。崇禎甲戌進士。官嘉興府推官。

とあり、文德翼は明末の人である。

②④ この「明實錄」の記事に對應するものとして、「^萬應天府志」^{卷三}郡紀下には、

(洪武)十八年四月。……造應天賦役冊。定民戶上中下三

等。凡徭役取驗。

とあり、また「^萬江浦縣志」^{卷一}縣紀にも、

(洪武)十八年。造賦役冊。定民戶上中下三等。凡徭役取驗。

とある。

②⑤ 清水泰次「明代の戸口冊(黃冊)の研究」(社會經濟史學五一、一九三五年)、山根前掲書(二五—二六頁)参照。

②⑥ この洪武十八年の賦役冊が賦役黃冊とは別個のものであることは、清水・山根兩氏により、また岩見玄「明代における雜役の賦課について——均徭法と九等法——」(東洋史研究二四—三、一九六五年)に指摘されているが、第二回黃冊搬造の行なわれた洪武二十四年以後も、黃冊とは別個に賦役冊が存続したかどうかについては、清水氏はその存続を肯定し、山根は斷定を留保しつつも清水氏に近く、岩見氏は否定している。この點については、前述のように、後代において黃冊以外の徭役科派臺帳が、この賦役冊と同じく糧長により作製されていること、黃冊は徭役科派の基礎となるものではあるが、具體的に各役目を入戸に割當てる際には、徭役科派對象たる人戸と役目を對應一覽せしめる別個の臺帳作製の手續が必要と思われること、山根氏も引用されたように、「^正姑蘇志」^{卷四}「宣續五」に、

王英建安人。亦洪武中知崇明。……從子銳字允成。以進士知山東之新城。內艱服除。調補崇明。審驗人戶。類分上中下三甲九等。仍爲縣・區・圖三冊。定徭役貢賦之法。

とあるのが有力な根據となることなどの理由により、名稱はともかく賦役冊と同種の冊籍は洪武二十四年以後も存続したと考え

る。

②⑦ 川瀬前掲論文、梁方仲前掲書（四七・四八頁）参照。

②⑧ 排解については、仁井田陞「中國の農村家族」（一九五二年、三九一頁）、同「中國法制史研究（刑法）」（一九五九年、十五頁）参照。

②⑨ このほか糧長による排解を伝える記述としては、なおつぎのようなものがある。史鑑「西村集」^{卷八}行狀「先考友桂府君行狀」は、吳江縣の糧長であつた父史珩につき、

先考諱珩。字廷貴。姓史氏。號友桂。人或稱桂軒。居吳郡松陵邑范隅鄉穆溪里。……閭里間交惡者。咸來詣先君。先君出片言決之即定。其用心平。持論公。好惡無所偏。一以義爲準。不期服人而人自服之。

と言ひ、吳寬「匏翁家藏集」^{卷六}陸宗博墓誌銘には、

長洲陸宗博以成化十三年十一月己丑卒。年四十二。……予乃歎曰。宗博一布衣耳。徒爲郡縣推長田賦。能施惠于里人。遂致人悲慕如此。……凡君平日於人危急。率救卹之。不係於賦役者尙多。故言。出能使人信服。公事易完。而私爭易決。

とあり、楊榮「楊文敏公集」^{卷二}墓表「龔思齊墓表」は、

崑山有篤善之士龔思齊。以宣德癸丑五月己巳卒于家。……邑里推重之。遂擧爲糧長。以董一區賦稅。思齊存心公恕。不驅迫以厲其下。人不知勞而賦無逋負。鄉人有疑事。必往諮詢。無不裁置得宜。有爭訟。多不之官。惟求思齊一言。……

と述べ、倪謙「倪文僖公全集」^{卷十}墓碣銘「義官梅軒華公墓碣銘」は無錫縣糧長華佐につき、

邑長吏擧督區賦。仁恕公平。大家牛車。小家擔負。爭先樂輸。……人有過輒面折不貸。鄉人有訟。率走白於公。聽其一言而解。其爲人信服如此。

と傳へ、同じく「倪文僖公全集」^{卷十}故訥菴處士徐公墓誌銘には、

公諱恣。字時中。姓徐氏。系出南州高氏孺子之後。宋紹興中有曰小三者。始自豫章徙金壇之玉田。族衆日蕃。故今爲金壇人。……無少吝。遠近稱其長厚。處事明決。不事阿狗。故人有忿爭者。必就正於公。一言之間。是是非非。皆得其情。莫不信服。有司聞其賢。擧長萬石。……成化丙戌七月二十八日。以疾卒於正寢。春秋五十有八。

と、また陳寶「祭酒琴溪陳先生集」^{卷三}傳「承事郎近齋華公傳」にも、

華氏子鄉進士諫述厥考行實。凡若干條。……其說曰。先君諱輝。字文遠。別號近齋。南齊旌孝子寶三十四世孫也。華氏世甲江南。……有聞訴者。努力傷財。務俾兩罷。雖觸險構怨。不自惜也。……屢長鄉賦。平出納。寬逋負。

とある。なお糧長による裁判は、解運途上の糧船中においても行なわれた。「國江陰縣志」^{卷二}雜識二には、

明制戶部徵糧。公牘直下糧長。……蓋糧艘上設有公案。平時以責夫役・水夫者。

と傳へられている。

③⑩ 「萬常州府志」^{卷六}錢穀三徵輸に、

國朝役法。以編民一十一戶爲一甲。每甲擇丁田多者一人爲長。是爲田甲。甲領中產十戶爲甲首。……十甲爲一里。每

年輪一田甲應役。管攝十甲。催辦錢糧。勾攝公務。謂之里長。

とあり、「康熙無錫縣志」^{卷二}徭役にも、

里甲。每一里爲一番。每番編民一百一十戶。擇丁田多者爲里長。是爲田甲。

とあるから、田甲とは里長戸を指す。

③① 「御製大誥續編」水災不及賑濟第八十五が、

往爲有司徵收稅糧不便。所以復設糧長。……當復設之時。特令赴京面聽朕言。……如果有積年荒田。明白具本來奏。

徐齡了。各各糧長目擊耳聞前去。一至本鄉。巧立名色。其弊多端。……却通同刁猾頑民。妄告水災。本災一分。告災十分。

と述べ、また「御製大誥三編」陸和仲胡黨第八に、

蘇州府吳江縣糧長陸和仲。當十八年糧長。其年水災民田。

朕謂諸糧長曰。今年水爲民患。低下之田必傷。爾等歸。明白查踏。親自回奏。……并積荒田地。以憑開除。以憑正收作數。

とあるのは、いずれも本文の記述を裏付ける。

③② 史鑑の傳を述べた吳寬「匏翁家藏集」^{卷七}隱士史明古墓表に

よれば、史鑑は弘治九年に六三歳で歿しているから、糧長が一區内水利を統轄していたのは、成化年間以前と言えよう。^{（隆乾吳江縣志）}^{卷十}徭役《明役法》の項は、

塘長四十六人。景泰五年始置。每區一人。後革。成化八年

設水利官。復每區增塘長一人。凡九十二人。十三年革。

と述べ、景泰五年に每區一人の塘長が初設され、その後廢止さ

れたが、成化八年每區二名となり、同十三年に一名を削られて每區一名にしたとあって、史鑑の所説が確認される。したがって、塘長の初設を洪武年間とする星斌夫氏の所論（『明代漕運の研究』四九六―九七頁）は疑問で、^{（嘉慶嘉定縣志）}^{卷六}田賦考中徭役にも、

國初無塘長之名。其後始置。

とある。

③③ 「明實錄」洪熙元年八月癸未の條に、

命廣西按察司胡榮爲大理寺卿。同四川參政葉春巡撫直隸及浙江諸郡。

とあり、この時胡榮は大理寺卿となつて南直隸・浙江の巡撫を命ぜられ、宣德五年三月南京都察院右都御史となり（同宣德五年三月戊辰の條）、同年九月には周忱が江南巡撫となつてゐるから（同宣德五年九月丙午の條）、この間胡榮が江南を巡撫していたこととなる。なお胡榮は宣德五年三月に胡姓を更めて本姓の熊に復しており（同宣德五年三月辛酉の條）、したがって、本文に欽差大理寺卿胡（榮）が總圩長・圩老を立てたとあるのは、熊姓に復する以前のことであろう。

③④ 「明實錄」宣德五年四月丁丑の條には、

命南京署刑部侍郎成均。往蘇・松等處。專理農務。

とあって、成均は宣德五年四月江南の「專理農務」を命ぜられ、同年八月南京刑部右侍郎に（同宣德五年八月乙卯の條）、七年三月に南京戸部侍郎となり（同宣德七年三月丁卯の條）、同年七月には浙江巡撫になつてゐる（同宣德七年七月辛酉の條）。

③⑤ 史鑑の《吳江水利議》には、塘長・耆老・耆長など新設の水利關係諸役を廢止して、従前通り一區の水利は糧長、一圩の水利は圩長に管轄せしめよとあったが、この小圩長は《吳江水利議》の圩長にあたるものであらう。

③⑥ 「浙西水利書」は宋・元・明三代の江南デルタ地帯水利に関する議論を摘録したものであるが、邵寶「奉議大夫湖廣按察司僉事姚君文瀾墓志銘」（「國朝獻徵錄」^{卷八}所收）によれば、姚文瀾は成化二十年進士、湖廣按察司僉事に至っており、その間工部都水司主事として浙西の水利を監督し、水利書を集め、自らも事宜一編を著したとある。また金藻の「三江水學」は「^{崇禎}松江府志」^{卷五}著述に著録されている。

③⑦ 況鍾「明況太守龍岡公治蘇政績全集」^{卷十}條諭下查報被災田畝人口示（宣德七年七月）にも、

爲水災事。據長洲等縣申。自四月天雨連綿。至五月湖水汎漲。居民房屋田圩多被淹沒。除已奏知。着落治農官吏・糧（長）・里（長）・居民。儘力車救外。今續報原淹田地積水。尙有三四尺以上者。

とあって、糧長・里長による排水作業を述べている。なお、排水が共同作業として行なわれただけでなく、旱年における灌水もまた共同で行なわれた。「^{乾隆}吳江縣志」^{卷三}風俗一生業には、

邑當江湖之中。最爲窪下。而所在多浮漲壅閼。故梅雨連綿。溪水泛溢。則田隨之淪。苟遇亢旱。則支渠乾涸。禾根龜坼。潦與旱皆不免也。……早則用連車遞引溪河之水。傳畝入田。俗呼打纏。

とあり、旱年における共同灌水作業は打纏と言われた。

③⑧ 「弗取其傭」ととくに断わっている點からすると、こうした桔槔などの使用には、普通何らかの形で賃賃料のごときものが伴った事實を想像させる。

③⑨ 夏原吉は永樂元年より二年にかけて、戸部尙書として江南の治水事業を主宰した（「明史紀事本末」^{卷二}治水江南、「明史」^{卷四九}夏原吉傳參照）。

④① 糧頭とは、「^{崇禎}松江府志」^{卷五}志餘に、

陳秀原籍汴梁人。避紅巾亂。徙居華亭三界址。太祖召諸糧頭入見。秀手足胼胝。呼爲好百姓。

とあるように、この場合糧長を指すとして誤りあるまい。

④② 踏車の際太鼓を用いることは、「明詩綜」^{卷十}謝應芳「踏車婦」にも、

吳田水深三尺許。猶是去年秋暮雨。勸農使者催春耕。田甲頻搗水車鼓。

とある。謝應芳は元末明初武進縣の人。

④③ ここで「明初」と言うのは、文字通り明代初期の意味ではなく、(D)に「嘉靖中年に至りて漸く廢馴す」とある嘉靖中年との對比において理解すべきである。

④④ 「明史」^{卷六}輿服三では「靴」字を禪に作る。なお「^{萬曆}大明會典」^{卷六}禮部八冠服一の圖によれば、靴は短いナガグツである。

④⑤ 「明史」^{卷六}輿服三では、
（洪武）二十五年。……詔禮部。嚴禁庶人不許穿禪。止許穿皮札襪。惟北地苦寒。許用牛皮直縫禪。
とある。

④⑥ こうした靴や頭巾は、その地位に應じた所定のものの着用が

強制されており、況鐘「明況太守龍岡公治蘇政績全集」^{卷十}條諭上禁棍惡積弊示（宣德五年十月）に、

爲禁約事。……有刁詐之徒。僞造假引。通同長・吳二縣里老軍民人匠。私買出入爲非。經年累歲。雇鄉民。替當館夫。營充門子。祇候使客。……有包攬替當防夫。公然賣放囚徒。打死無錢人犯。有違例穿靴。不戴本等頭巾。結絲棕帽・圓帽。裝官舍人。……館夫・防夫即拘正身應役。門子不許額外濫充。鄉市人民俱帶本等頭巾。所轄巡司關津。務要用心盤詰。

とあるのは、そうした服裝の強制を示している。また申時行「賜間堂集」^{卷七}十序「家傳附」は、その祖父乾（弘治三—嘉靖四二年）の傳を述べて、

祖乾。字易卿。號東城。……東城府君少時育于外兄怡竹徐翁所。遂以爲子。從其姓。翁素饒于貲。……然常領重役。徭使縣中。及長鄉賦。府君既長。則代翁爲家督。公私嚴辦。靡不當翁指。是時吳俗簡樸。府君婚時。猶以平定巾・白褲成禮。

と言ひ、乾が養父に代わつて家督となり糧長の職務を繼いだか、その婚禮時には平定巾・白褲を用いたとされる。平定巾とは、「萬大明會典」の「士庶巾服」に、

洪武三年定。士庶初戴四帶巾。今改四方平定巾。

とあるように庶民の頭巾であり、平定巾・白褲をもって婚禮を行なっているのは、この時にはまだ糧長の職務を繼いでいなかったためではないかと思われる。

④⑥ 王圻「三才圖會」器用^{卷五}によると、轎には二種類あつて、一

つは二人で擔ぐもので肩輿と言ひ、他は四人を用いて大轎と言われているが、四轎とは轎夫四人の大轎を指すのであらう。

④⑦ 大糧長は「崇禎興縣志」^{卷二}「藝文志」所收の姚士舜「大布衣涇南曹公傳」にも、

其若我邑踐更有大糧長。

と見えるが、朱元弼「猶及編」に、

嘉靖時吾郡編大糧長。每縣只三四人。分收通邑糧。任其役者。必富豪也。

とあつて、一縣に三、四人設けられ全縣の糧を徵收するところから、前述した糧長中の有力者よりあつた縣總ではないかと思われる。

④⑧ 以上のほかに糧長による刻書出版の事例も傳えられており、吳寬「匏翁家藏集」^{卷七}二「素菴府君墓表」には、

好爲義事。故都憲思菴吳先生小學集解成。謂是書有補於世甚大。亟命工刻之。

とあつて、常熟縣糧長錢完により吳訥の「小學集解」が刊行され、「嘉興縣志」^{卷九}「義俠志」に「劉儔傳」も、

儔亦能詩。楊維禎・高啓諸人遺集。皆爲之梓行。

と常熟縣糧長劉儔による楊維禎・高啓等の詩集出版を傳えている。

④⑨ 「隆吳江縣志」^{卷三}人物十隱逸に、史鑑の傳を述べた後、明末の人朱鶴齡の言を附して、

朱鶴齡曰。成・弘間。吳中高士首推石田^{周沈}。次則明古

^{（史）}。此通國之公評也。

とあり、同志^{卷五}七「舊事」は吳名臣「國朝名德錄」を引いて、

憲・孝之間。世運熙洽。海内日興於藝文。而吳尤稱多士。於時若杜用嘉・陳孟賢二公。以高年爲諸儒倡。最先有名。繼則史明古・沈啓南輩相踵而起。雖其造詣或殊。大抵博雅有文。行義修潔。出入則古衣冠。人望而起敬。部使者若郡縣大夫。側行撤席。將迎恐後。縉紳過郡中者。輒造其廬而請焉。高標遠韻。照映一時。鄉人至今稱之不衰。

と述べ、成化・弘治年間において蘇州の「高士」として「通國之公評」を得ていたのは沈周と史鑑であり、蘇州に赴任し、あるいはそこを通過する地方官・官僚は、いずれも訪れて敬意を表したという。沈周は吉川幸次郎「評傳沈石田——市民的教養人の系譜——」（朝日ジャーナル一九六〇年四月二十四日、五月一日・八日號）にも指摘されるごとく父の代より糧長であり、史鑑もまた曾祖父以來代々糧長をつとめた家であった——前引史鑑「西村集」の《曾祖考清遠府君行狀》は曾祖仲彬の、《先考友桂府君行狀》は父珩の傳であり、史鑑については吳寛「匏翁家藏集」^{卷四}「隱士史明古墓表がある——。もとより全ての糧長がこうした郷評を得ていたとは思われないが、當時の蘇州で第一流の「高士」と稱されるものがともに糧長の家出自している點に、糧長の社會的地位が示されている。また趙士春「保間堂集」^四「家乘下先世瑣事記《文毅公六事》」には、

文毅公十五歲。補博士弟子員。十九歲。聲宮公會。一老秀才單姓者在前行。偶從後擠之。秀才回顧曰。原來是汝糧長胚。當時鄉紳子姓。稍長遺質充糧長。故以不識字誚之。

と趙士春の祖父文毅公、すなわち趙用賢についての逸話を載せている。文意は、趙用賢が生員であった時儒學で公の集會があ

り、たまたま用賢が前にいた老生員の單某をおしたところ、單某は振返って、「何だ、糧長の卵か」と言った、當時は鄉紳の子孫で家の富裕なものはよく糧長にあてられたので、おまえなどは進士になれない、糧長が關の山だとの意味でとがめたのだというのである。ここでは、「糧長胚」とは官僚にはなれない奴との嘲笑の意味で使われており、この話がすでに糧長の地位の低下した嘉靖末より隆慶にかけてのことである點を考慮する必要があるが、他面官僚の家の子孫が糧長にあてられることの多かったことをも示すもので、このことは申時行「閩江吳氏義田記」^{（康熙無錫縣志）}^{卷四}「碑記所收」に、

錫於江南爲壯縣。縣以時徵賦於鄉。率名召其鄉之高賢著姓若仕宦者之子孫。使爲之長。

と、また瞿景淳「瞿文懿公集」^{卷十}墓誌銘《仲兄趣湖處士暨配褚氏墓誌銘》に、

時^{（嘉靖）}掌鄉賦者多破產。而縉紳子弟尤甚。

とあるのによっても確認されるが、このように官僚の家の子孫が多く糧長にあてられている點も、糧長の地位を示唆するものであろう。

⑤ 況鐘「明況太守龍岡公治蘇政績全集」^{卷十}條論上革除圩長示（宣德五年十月二十日）には、

訪得。所屬長洲等七縣。先該欽差大理寺卿胡。將各縣糧長。每區設立總圩長・圩老六名。通該一千六百七十二名。并小圩長與同糧・里提督農務。相兼催辦稅糧。近年以來。公然接受狀詞。……甚至役使小民。在家種田。搖船出入。生事害民。

とあって、糧長が農民に強制して自己の田地を耕作させ、「皇明條法事類纂」^卷五刑類・職官有犯《禁約散官違法・禁豪強以宛民患》に、

成化十五年二月二十五日。禮部等衙門爲建言民情事。……

計開 一件。禁約冠帶散官違法。各處上馬納粟冠帶榮身散官。多有不知法度。恣意妄爲違式起蓋廳堂。僱用器物。其至謀充糧長。出入騎馬。役使貧民。扛擡四轎。……下鄉催糧。逼取私債。准折田產屋室。姦宿婦女。擅准詞狀。無所不爲。稍有不從。尋風陷害。

とあり、また同書^卷五刑類・五刑に、

弘治七年九月二十七日。刑部等衙門太子少保尙書等官白等題。一去羽翼以抑豪強。切見。江南地方有等豪富之家。或奉例納粟冠帶。或自祖充當糧長。專持己富。不遵國法。……或強奪小民家業。或欺姦貧民妻女。威縛欠債人戶。私置牢獄。妄稱祖田名色。公然詐取。非禮犯分。靡所不爲。と傳えられるような、赤裸々な威迫と暴力を用いた農民よりの勞働力・田産の強奪は、糧長の豪族としての實力とともに、さらに農民に對する身分的優越をも示すものであらう。

⑤① この史料に基づいて、里長戸と一般農民との身分的格差を鋭く衝いたのは、安野省三「明末清初、揚子江中流域の大土地所有に關する一考察」（東洋學報四四—三、一九六一年）であつた。

⑤② 韋慶遠「明代黃冊制度」（一九六一年、五一頁）に洪武・永樂年間の事例が引用されている。後世とは異なり、この時期には監生より直ちに官僚に擢用されることが少なくなかったから、

この事實は注目すべきである。

⑤③ 「杜騙新書」^卷一類脫剝騙《遇里長反脫茶壺》には、

趙通延平府南平縣人也。家世積善。錢糧頗多。差當七畝一甲里役。其甲首林錢一者。機智過人。不務生理。第飲賭宿娼。後來家業消條。無處棲身。只得逃外。通亦不知其向往。一日通與僕往杭貿易。經過浦城。憩息于亭。適見錢一。通罵之曰。這奴才。你逃外數年。戶丁不納。糧差累賠。是何理也。今你見我。你何以說。錢一被罵不甘心。生一計。向前賠笑曰。我每欲回送條編與里長。奈我家中欠人財物甚多。難以抵償。故不敢回矣。今幸遇里長。如天降下。敢再推辭。況這幾年。賴里長福庇。開店西關馬頭。家中稍裕。新娶邑人徐某之妾爲妻。被人欺姦。我乃孤身一人。出外獨居。無奈伊何。今幸遇里長。則有主矣。（下略）とあり、延平府南平縣の里長趙通が杭州に行った際、條編銀を滞納して逃散した甲首林錢一に遇い欺かれる話を載せているが、甲首林錢一は趙通を里長とその役名で呼んでいる。また「今幸遇里長。則有主矣」というのも、里長と甲首との間柄を示すものであらう。

⑤④ 老人がその地位を示す特異な服裝をしていたことは、「鹿村志」風俗に、

明初設老人。卽古之亭長。穿帶老人頭巾・圓領・絲線早鞦。一鄉有不法事。許赴告准理。とあるのによつて明らかである。

⑤⑤ 無論これは江南を中心としての立論であり、糧長の設置されなかった他の地域においては、里長戸の占める地位がより重要となるであらう。